

岡鹿門『観光紀游』訳注——その四

柴田清継
井上真梨奈
村上直美
万 莎

本稿は本誌第八号以来連載中の岡鹿門『観光紀游』訳注の続篇である。これまでと同様、私が二〇一四年度、武庫川女子大学大学院文学研究科日本語日本文学専攻において担当した授業科目「国際交流研究」の中で、履修者の学生と共に『観光紀游』を一字一句、その表現の背景も押さえつつ読解する作業を行い、読解した結果を訳注という形で表したものである。私の共著者三名は、いずれも二〇一五年度修士課程二年次に在籍中の人たちである。

今回訳注の対象としたのは、巻三「蘇杭日記卷下」の陽暦八月一日から二十日までの部分、巻四「滬上日記」巻頭の高鋭一、及び高橋剛の各序、「滬上日記」の八月二十一日から三十一日までの部分である。この間、鹿門一行は慈溪を後にして、ほばもと来たコースをたどって杭州へと戻り滞在していたところ、清仏戦争激化のため、さらに上海まで戻ることを余儀なくされ、それからしばらく上海に滞在する。

底本、訳注の形式等については、本稿その一冒頭の説明をご覧いただきたい。また、参考にした文献の主なものとは巻末に掲げた。

（柴田清継、二〇一五年十一月二十四日記す）

原文 八月一日〔十一日〕擬待夜潮辭發。濯与静庵治行。竹孫為余作書画数紙、硯雲賦贈五律四首、有「五方異其俗、安得互相強」句。蓋指前論洋烟機器、意見不合也。方今風氣一變、萬国交通。此五洲一大變局、而拘儒迂生、輒引經史、主張陋見、不知宇内大勢所以至此。此殆巢幕之燕、不知及堂之火者^①。余私謂、非一洗烟毒与六經毒、中土之事、不可下手。六經有可信者、有不可信者。苟信不可信者、流毒無所不至。黄公度^②在東、悦余好論洋事、常曰「形而上、孔孟之論至矣、形而下、欧米之学尽矣」。論当今之事者、不可無此見解也。

硯雲設別宴、靄卿・幼蔡・石鈞・仁和会餞。船人告潮滿。乃辭。惕齋使静庵導。此游惕齋為東道地主、拳族歡迎、淹稽旬餘、実為厚誼。唯恨硯雲病足、不得同天童寧波之游也。衆送至岸上、皆黯然。月色如昼、風度蘆葦、蟲声滿地、殆有秋意。

【注】①「巢幕之燕、不知及堂之火」『春秋左氏伝』襄公三十一年に「猶燕之巢于上」とあるのに基づいた表現。②「六經」詩・書・礼・樂・

易・春秋の六つの經書。③「黄公度」一八四八～一九〇五。黄遵憲。公度は字。清末の外交官。明治十年末から同十三年末まで駐日清国大使館の参贊官を務めた。④「形而上」尽矣」「形而上」は精神、道等の無形物を言い、「形而下」は物質・器物等の有形物を言う。『易』繫辭伝上の一節に基づく。

訳文 八月一日〔十一日〕夜の潮を待つて別れを告げ、出発することにした。濯と静庵氏とは出発の支度をした。竹孫氏が私のために書画を数枚かいてくれた。硯雲氏は五律四首を作り贈ってくれ、その中に「五方其の俗を異にす、安くんぞ互相に強きを得ん」の句があった。思うに、このまえ阿片や機械に関する議論をして、意見が合わなかったことを指しているのだろう。方今、風潮が一変し、萬国がこもこも通ずるようになった。これは全世界の一つの大きな変化の局面なのだが、見識の狭い読書人や時代遅れの者たちは、事あるごとに經書や史書を引いて、浅はかな見解を主張し、宇内の大勢が今のような状況に至った所以を知らない。これはほとんど幕に巢を作った燕が、堂まで燃え移ってきた火に気付かないのと同じである。私は個人的

には、阿片の毒と六経の毒とを洗い流さない限り、中国のもろもろの事は、手の下しようがないと考えている。六経には信することのできるものもあるが、信することのできぬものもある。もし信することのできぬものを信じたならば、至る所に毒が流れてしまう。黄公度氏は日本にいたとき、私が好んで西洋の事を論ずるのを気に入ってくれ、いつもこう言っていた。「形を超えた方面においては、孔孟の論が至上だが、形をもつ事柄については、欧米の学が詳細を尽くしている」と。当今、議論をする者は、このような見解をもたなくてはならない。

硯雲氏が別宴を設けてくれ、霽卿・幼蔡・石鈞・仁和の諸氏が会し、はなむけしてくれた。船員が満潮になったと言ったので、別れを告げた。惕斎氏が静庵氏に案内役を受け持たせた。この旅は惕斎氏が主人となって世話をしてくれ、族を挙げて歓待してくれ、十日餘り滞在を引き延ばした。実に厚い誼であった。ただ残念なのは、硯雲氏が病が重く、天童・寧波の旅をとにもすることができなかったことである。みんなは岸辺まで見送りに来てくれたが、皆浮かぬ顔をしていた。月の色が昼のようで、風が葦を吹き渡り、虫の声が辺り一面から聞こえて来て、ほとんど秋のような気配が立ち込めていた。

原文 八月二日〔十二日〕晨抵餘姚。歆〔歆〕夫力病出見。余問此間故事、曰門前長流即姚江、姚舜姓、舜水先生号亦取義于此。自此東南四十里有歷山、舜所耕。虞山今為県、禹封丹朱処、土人虞姓甚多。酒出、伯幡兄弟及姻人王葆堂款接。歆〔歆〕夫筆示曰、『東漢許叔重〔慎〕《說文解》十五卷、經十六年、始成書。宋徐鉉奉詔校定、其弟鍔有伝注。特病刻本不精、字多訛舛、前輩皆謂藝苑宝笈、成一家言者、二三十氏、瑾瑜互見、不如二徐為最古。先君光祿君、平日訓子弟、曰讀書不可不知字、知字必從許書而始。今世所通行行楷、非真書、非恭楷、非八分^③、非大小篆。許書則有籀文・古文・大篆・奇字諸体。許氏成是書、將經朝議、而一天下書体。体格源流、音訓異同、形義假借、運用虛實、四者許書源流、不可不講。余受家學、稍有論著。不知子嘗講是書否』。余書答曰、「小人矇古書、未嘗講許書。私謂三代設小學、教六藝、書為其一。『爾雅』『急就章』『說文』、實三代小學、所

授董蒙。而其法不伝、老儒宿学、兀兀終生、不得其要。三代聖王之治不可再見、此其一也」。跋《跋》夫不答、豈不平余以『説文』為童蒙書耶。再飲入夜。

解纜至閨門壩、水涸、曰舟大不可前、乃回棹。

【注】①「王葆堂」陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典』（浙江古籍出版社、二〇〇五年）所載の、浙江省上虞の人で、葆堂と号する王恩元（一八五八〜？）という人物かもしれない。②「徐鉉く伝注」徐鉉（九一六〜九九二）は五代南唐から北宋にかけての学者。『説文解字』を校訂した。その弟、徐鍇（九二〇〜九七四）は『説文解字繫伝』を著した。③「八分」秦代の一種の字体。隸書に似ている。または、隸書の別名。④「奇字」王莽の時の六体書の一つ。ほぼ古文を改変したもの。

訳文 早朝、餘姚に着いた。弢夫氏が病を押して出て来てくれた。私が当地の故事を問うと、次のような説明をしてくれた。「門前の長い流れは姚江で、姚は舜の姓である。舜水先生の号もここから取られている。ここから東南へ四十里のところに歴山があり、舜が耕した所である。虞山は今、県となっているが、禹が丹朱を封じた所である。土地の人に虞姓の者がはなはだ多い」。酒が出た。伯幡兄弟および親戚の王葆堂氏が歓待してくれた。弢夫氏が筆で次のように書き、私に見せた。「後漢の許叔重〔慎〕の『説文解字』十五卷は、十六年を経てようやく出来上がった書物である。宋の徐鉉が詔を奉じて校定し、その弟鍇に伝注がある。刻本が精密でなく、字に間違いの多いのが難点とはいえ、先学はみな学問藝術界の宝だと言い、一家言を成す者が二三十人、しかしそれぞれ長所と缺點があり、結局最も古い二徐に及ばない。先君光祿君は、ふだん子弟を教える時、次のように言ったものだ。『書を読むには字を知らないわけにはいかず、字を知るには必ず許慎の書物から始めなければならない。今の世に通行している、行書に近い楷書は、本物の楷書ではなく、謹嚴な楷書でもないし、八分でもないし、大小篆でもない。許慎の書物はどうかと言えば、籀文・古文・大篆・奇字の諸体がある。許氏はこの書物を完成後、朝廷の議決を経て、天下の書体を統

一しようとした。輪郭・品格の源流、音訓の異同、形義の仮借、運用の虚実、この四つは許慎の書物の源流であって、講釈しないわけにはいかない』と。私も家学を受けて、多少の論著がある。先生はこれまでこの書物を講釈したことがありだろうか。私も書いたもので答えた。「私は古代の字体に暗く、許慎の書物を講釈したことはない。個人的には次のように考えている。すなわち、三代には小学を設けて、六藝を教えたが、書はその一つであつた。『爾雅』『急就章』『説文』は、実は三代の小学であつて、童蒙に教授した書物である。しかしその教授の法は伝わっておらず、老儒や大学者がこつこつと一生をかけ取り組んでいるものの、その要を得ない。三代の聖王の治は、もはや見ることができない。これがその理由の一つである」。歿夫氏は答えなかつた。私が『説文』を童蒙の書としたことに不平だつたのだろうか。再び酒盛りをして夜になつた。

纜を解いて閨門壩まで行つたところ、水が枯れていた。「舟が大きいので、進めない」ということだったので、引き返した。

原文 三日〔十三日〕晨敲朱氏、伯幡為余雇小船二隻、一隻載行李、一隻与静庵及濯共乘。舟隘、僅容両膝。舟子踞船首、伸両脚蕩櫓二枝、極快、名曰划舟。^①官報郵書、皆用此舟。江広漸隘、経閨門・横河二壩。此間有壩有堰有閘、皆所以準高下、均水平。舟至此、羣衆挽輓。放翁詩曰、「人語正謹過古埭」、註云、「毎挽船、声喧甚」。^②然則埭亦壩類。午熱甚、繫舟樹陰、炊飯。上岸見刈稻。田側懸竹席、刈稻盈把〔把〕、則就竹席乱打。粒粒櫛脱、不甚勞力。此吾邦所未見。

踰一壩、至崧鎮、小泊晚飯。岸上市街、男女擁觀、使人不勝、移繫前岸。乘月而進、水涸。舟子泥行力推、転入別溝、始前。

【注】①「划舟」「划」は「劃」の誤りではないだろうか。舟をこぐという意味の現代中国語「劃舟」を鹿門が知らなかったため、ことさらに取り立てたものと思われる。②「人語々喧甚」「曉賦」詩の第五句。自注に「湖桑埭五鼓聞挽船声喧甚〔湖桑埭にて五鼓 船を挽く声喧しきこと甚だしきを聞く〕」とある。

訳文 早朝、朱氏を訪ねた。伯幡氏が私のために小舟二隻を雇ってくれた。一隻に荷物を載せ、もう一隻に静庵氏及び濯ともに乗った。舟は狭く、わずかに両膝を入れられるくらいであった。水夫は舳先にうずくまり、両足を伸ばして櫓二挺を漕ぐ。極めて速い。このことを劃舟という。官報・郵便、いずれもこの舟を用いる。川幅がしだいに狭くなり、閘門・横河の二壩を通った。この辺りには壩もあり、堰もあり、閘もあるが、いずれも高低をひとしくし、水平を均しくするためのものである。舟がそこまで来ると、群衆が引いたり方向を変えたりする。放翁の詩に「人語正に謹しく古埭を過ぐ」とあり、註に「船を挽く毎に、声喧しきこと甚だし」とある。ということは、埭も壩の類ということになる。日中の暑気が甚だしい。舟を木陰につなぎ、飯を炊く。岸に上がって見たところ、稲刈りをしていた。田の側に竹で編んだござが懸けられ、刈った稲が手に一杯になると、竹のござにバッシバッシと叩きつける。粒がバラバラと抜け落ち、さほど力を労さない。これは我が国で見たことのないものである。

一つの壩を越えて、崧鎮まで行き、しばらく舟を泊めて夕食を摂った。岸上の市街から男女が群がって、こちらを見物するので、耐えがたく、反対側の岸に移って舟をつないだ。月明かりの下、進もうとしたが、水が枯れていた。水夫が泥の中に入り、力ずくで推し、転じて別の水路に入ったところ、ようやく進みだした。

原文 四日〔十四日〕泊在春浦壩。淤泥亀裂、僅通涓流。驅牛挽舟、出曹娥江。長江無際。更踰鯉浦壩。平湖如鏡、岸上人家竹樹、倒影水中、湛然如鏡、使人不厭頻繁往復。一溝右折、入紹興南門。城壁三重、呀然如行洞中。紹興句踐^①所都、人家四五萬、一方都会。訪陸有章、交仲声書。延入別室、酒飯。就樓上閑室而小睡。尾瓦烘日、毒熱如蒸。陳翰翥〔文瀚〕來見。仲声友人。曰「紹興以酒著。釀戸前推陳・趙・表・杜四姓。繼起者徐・李・胡・田四姓。一姓所利、不下百万金。久經年歲者、称陳酒、尤為世所称」。

夜乗月歩市街、至大善寺。七層塔高聳雲霄、伝為宋代所建。市人見余異服簇擁、有投瓜皮瓦石者、猶我邦三十年前、歐人始来江戸時。

【注】①「句踐」？前四六五。春秋時代の越の王。②「表」「袁」の誤りかもしれない。

訳文 春浦壩に舟を泊めた。たまった泥が亀裂していて、わずかに細い流れが通じているだけだ。牛を駆って舟を引かせ、曹娥江に出た。長江が果てしなく広がっている。さらに煙浦壩を越えた。平たい湖が鏡のようで、岸上の人家や竹が、影を水中に逆さまに映し、そのいっばいに満ちた水は鏡のようで、頻繁に往復しても嫌にならない。一つの溝を右折して、紹興の南門に入った。城壁が二重になっており、その間ががらんとしていて、洞穴の中を行くかのようなのである。紹興は句踐が都とした所で、人家四、五萬、この地方の都会である。陸有章氏を訪ね、仲声氏の手紙を渡した。別室に案内し、酒と食事を出してくれた。楼上の静かな部屋でしばらく寝た。尾瓦が日に照りつけられ、ひどく暑く、蒸されているかのようなだった。陳翰齋（文瀚）氏が面会に来た。仲声氏の友人である。陳翰齋氏が言うことには、「紹興は酒で有名です。造り酒屋は、以前は陳・趙・表・杜の四家を推したのですが、継いで起こったのが徐・李・胡・田の四家です。一家の儲けは、百萬金を下りません。久しく年を経た酒は陳酒と称し、世に褒めそやされています」。

夜、月の明かりを頼りに市街を歩み、大善寺まで行った。七層の塔が高く空にそびえている。宋代に建てられたものと伝えられている。街を行く者たちが自分たちとは異なる私の服に気付いて、群がり取り囲み、瓜の皮や瓦石を投げつける者がいた。我が国の三十年前、ヨーロッパ人が初めて江戸に来た時と同じようなものである。

原文 五日〔十五日〕有章為朱氏幹葉舖商務。鄭榜「官燕洋參麗參」數大字。官燕、謂燕窠、產暹羅・印度諸方、官置局權之。人參產朝鮮、曰麗產。產日東、曰洋參。洋參雲州為第一、日光・會津為下等。有章導觀望海亭。出東門。城壁厚三四丈、瓦甃建築、門架三層樓。一山突起。坂墳大石、直至絕頂。頂上有亭、就而望、市街村落、田疇湖沼、歷歷指掌。西北迤翠、為會稽四明諸山。東南極目無際、直接海滢。望海名不虛也。翰齋邀飲一樓、熱不可勝、一酌而散。

三庠生來見。余問曰、「通天地人三才謂儒。四子六經說天地人、果無一謬處乎」。三生請教。余曰、「『春秋』書日虧、為日食。說者曰、『日為蝦蟇所食』。此三歲童子所不信。真不可一咲乎」。因拳洋說、三生愕然。

晚飯上舟。舷板繪花鳥、臥床・椅子・机案皆備。出西郭、有石橋、曰迎恩。來時自此右折、探蘭亭。輒出清田湖。月色如昼、水天空明。時見水中有物躍出、就而視之、水牛十數頭出沒也。舷頭坐賞、不覺夜深。

【注】①「庠生」明清時代の「童試」（府州県学に入學する試験）の合格者。秀才。②「四子」『論語』『大学』『中庸』『孟子』。いわゆる四書のこと。

訳文 有章氏は朱氏の下で葉舖の商務をつかさどっている。店に「官燕洋參麗參」と書いた大字が掲げられている。官燕とはツバメの巢のことで、タイ・インド等の地域に産し、お上が局を設け、これに税をかけている。人參は朝鮮に産し、麗産という。日本に産するものは、洋參という。洋參は雲州を第一とし、日光・會津を下等とする。有章氏が望海亭へ案内してくれることになった。東門を出た。城壁は厚さ三、四丈、瓦で建築され、門には三層の樓が架け渡してある。高く突き出た一つの山がある。坂には大きな石が埋められていて、それがそのまま絶頂まで続いている。頂上に亭があり、そこから眺めると、市街や村落、田畑や湖沼が、掌を指すかのようにはっきりと見える。西北にくねくねと伸びているのは、會稽・四明の諸山である。東南は見渡す限り果てしなく、そのまま海岸につながっている。望海の名もつともと思えた。翰齋氏がある酒樓でもてなしてくれたが、耐えられぬほどの暑さだったので、ちよつとだけ飲んでお開きにした。

三人の秀才が面会に来た。私が「天地人の三才に通ずる人を儒と言うわけだが、四書や六經の天地人に関する説には、果たして一つも誤ったところはないのだろうか」と問いかけると、三人は私の説明を求めた。私が『春秋』に日が欠けることを日食と書いているが、この日食について『日が蝦蟇に食われたのだ』と説く者がいる。しかし、この説は三歳の童子も信じないものだ。全く物笑いの種ではないか」と言つて、西洋の説を挙げると、三人は愕然とした様子だった。

夕食を済ませ舟に乗った。^{ふなばた}舷に花鳥が描かれていて、ベッド・椅子・机みな備わっている。西郭を出ると、石橋があつた。迎恩という名前である。来た時はここから右折して、蘭亭を探った。転じて清田湖に出た。月光が昼のようで、水も空も澄んで明るい。おりしも水中から何物かが躍り上がってくるのが見えた。近づいてよく見てみると、水牛が十数頭出沒しているのだった。舟べりに座つて見て楽しみ、夜が更けたのにも気づかなかつた。

原文 六日〔十六日〕泊在柯山。訪沈瘦生、歡迎、曰「貴邦仿歐風改服制、信否」。余曰、「敝邦服制仿隋唐、及武門握權、以冠裳不便戎馬、新制衣袴、為武士服、自非宗廟朝廷大事、常衣此服。僕所服是也。而是服長袖博帶、不便編銃隊。故維新兵興、列藩不約而歐服。朝令一仿歐風改服制、實有故也。弟山沢人、衣服唯意所適。故用故服」。談及法事。余曰、「不戰、則中土國威不振、戰則百萬糜爛。聞李中堂主和、左曾諸公主戰。未知和戰何決」。瘦生頗有不樂之色。以天雨、辭歸。一价馳至、強留。余辭以急前程。

至柯橋午飯。一帶石橋、長亘十餘里、首曰上馬村、尾曰下馬村、實為巨工。抵錢清。兩岸市街、頗為繁庶。轉出上河。渺漫如湖。一石橋曰皆元、長百餘丈、累石為柱、得二十門。此間河道縱橫、與來時所經不同。

訳文 柯山に舟を泊めた。沈瘦生氏を訪ねると、歡迎してくれ、こう私に尋ねた。「貴国がヨーロッパの風習に倣い服制を改

めたというのは、本当ですか」。私は答えた。「弊国の服制は隋唐に倣ったものですが、武門が政權を握るに及んで、冠と衣服が戦に不便なため、新たに衣と袴を制して、武士の服としました。宗廟や朝廷の大事以外の時は、常にこの服を着ています。私が着ているのが、それです。しかしこの服は長い袖に幅広の帯で、銃隊を編むのに不便です。それゆえ、維新に戦が起これと、列藩は約せずしてヨーロッパの服装をするようになりました。朝廷の命令で全面的にヨーロッパの風習に倣い服制を改めたのは、実は理由のあることなのです。私は山野の人で、衣服は気の向くままです。だから、昔の服を着用しているのです」。フランスとの問題に話が及んだ。私はこう言った。「戦わなければ、中国は国威が振るいませんが、戦うと多くの人たちがひどい目に遭うでしょう。李中堂は講和を主張し、左・曾の諸公は戦争を主張していると聞いています。和戦、いずれに決めるのでしょうか」。瘦生氏はすこぶる不満そうな様子だった。雨が降っていることを理由に、辞して帰った。一人の使用人が駆けつけ、強く引き留めようとした。先を急ぐことを理由に、断った。

柯橋まで来たところで昼食にした。この一帯は石橋が、長さ十餘里にわたっており、上馬村という所から下馬村という所まで、実に巨大な工事である。錢清に着いた。兩岸の市街は、すこぶる人家が密集している。転じて上河に出た。だだっ広くて湖のようである。その一つの石橋は皆元という名で、長さ百餘丈、石を重ねて柱とし、二十の門ができている。この辺りは水路が縦横に走っていて、来たとき通った所と異なる。

原文 七日〔十七日〕抵蕭山県。一江穿城、兩岸市街、人行如織。至西興、上岸雇轎。度錢塘江。一船乘客四五十名、渡舟官置、不要錢。上岸為杭州東郭。城樓二層、曰錢塘門。至珠寶巷、訪顧雲臺。示『申報』曰「法使在上海、詰責中土援安南要求二百萬磅^①、曾元帥不可。安南累捷、法兵死傷千數」。語多矜伐、余知其不實。又曰、「張經甫率同志演洋槍、日夜訓練」。經甫醇儒、而編兵。余愈知其為急。

遣濯弥勒寺、伴無適至。曰「已借仙林寺一閑室、以待焉」。寺宋代大利。放翁『入蜀記』記「仙林寺僧開館設湯飲」、是也。^②
乱後纔餘子房。^③掃殿背一室、安頓行李。茗爐香案、^④頗覺蕭散。

【注】①「二百萬磅」この時期の『申報』には、フランス側が清国に二千萬ポンドを要求したとの記事（複数）が載っている。②『入蜀記』「湯飲」『入蜀記』乾道六年閏五月二十日の条。③「子房」本坊から分かれた下位の僧坊。末寺。④「香案」香炉・燭台を載せる長方形の机やテーブル。

訳文 蕭山県に着いた。一筋の川が町を貫き、兩岸の市街は人がひっきりなしに行き来している。西興に着き、岸に上がって轎を雇った。錢塘江を渡った。一船の乗客は四五十名、渡し舟はお上が設けたもので、無料である。岸に上がると杭州の東郭である。城楼は二層で、錢塘門という。珠寶巷まで行き、顧雲臺氏を訪ねた。彼が『申報』を示して、「フランス使節が上海にいて、中国が安南を援助したことを譴責し、二百萬ポンドを要求したが、曾元帥は聞き入れなかった。安南が何度も勝利を収め、フランス兵の死傷は何千にも上る」と言ったが、言葉に自慢そうなところが多く、私はそれが真実ではないことが分かった。彼はまた、次のようなことも言った。「張経甫氏が同志を率いて西洋式銃の使い方を習わせ、日夜訓練させている」と。経甫氏は学識のある純粋な学者であるが、その氏が部隊の編成を行っているのだ。私は情勢がいよいよ急を告げていることが分かった。

濯を弥勒寺に遣わしたところ、無適氏を伴って帰ってきた。無適氏が言うことには、「仙林寺の静かな部屋を借りて、お待ちしております」。宋代の大きな寺である。放翁の『入蜀記』に「仙林寺の僧が客舎を開いて湯茶の接待をしてくれた」と記してある、その寺である。乱後は子房が残っているだけという。本殿裏の一室を掃き、荷物を置いた。湯沸かし釜に香案、すこぶる瀟洒な感じがする。

原文 八日〔十八日〕徐嗣元^①来見、曰「与内海吉堂・僧心泉^②熟知」。心泉本願寺僧、三年前游此。曲園先生賞其「西湖」詩、録于詩選中。余問法事、曰「接上海一信。福州怒法虜之無狀、已開戰端、未知勝敗如何」。余曰、「恐訛伝。両国方發大臣、論事由。無擅交兵之理。若果信、則曲在中土」。曰「開戦在両三日間」。因論法虜無狀、言頗憤懣。静菴来別。贈金謝勞。

【注】①「徐嗣元」字は起盒（庵）。一八三九年に『起盒印譜』を編輯している。②「心泉」北方蒙（二八五〇～一九〇五）。心泉は号。真宗大谷派の僧侶。明治十年、東本願寺支那布教事務掛となり、留学生を引率して上海に赴き、以後、断続的に中国に滞在し、布教以外の活動にも携わった。↓その二、六月十一日注①。③「曲園」詩選中『東瀛詩選』中に心泉の詩は見当たらない。④「法虜」フランス軍をさげすんだ言い方。

訳文 徐嗣元氏が面会に来て、こう言った。「内海吉堂氏と僧心泉氏をよく知っています」。心泉氏は本願寺の僧で、三年前にこの地に来ている。曲園先生が彼の「西湖」詩を賞し、『東瀛詩選』中に収録された。私がフランスとの一件を尋ねると、こう言った。「上海からの手紙によると、福州では法虜の無礼なのに怒り、すでに戦端を開いたが、勝敗がどうなるかはまだ分からないとのことだ」。私が「恐らく訛伝でしょう。両国が今まさに大臣を差し向けて、事由を論じているところなら、勝手に交戦するはずがありません。もし本当ならば、非は中国にありますよ」と言うと、彼は「二三日のうちに開戦となるでしょう」と言い、法虜の無礼なことを論じ、すこぶる憤懣やるかたなさそうな言い方をした。静菴氏が別れのあいさつに来た。金を贈って労を謝した。

原文 九日〔十九日〕晨聞爆竹四起。曰「祝観音誕辰」。有二市人、設大釜仏前、滾油煮動植雜物、曰「練観音秘方膏」。留無適午飯。

曰「中土士人奔競、科第為第一。州県学官、試書院生員曰院試、登第曰秀才若庠生。庠生詣省就試、曰省試若郷試、登第曰举人若孝廉。举人、会京都就試、曰会試、登第曰進士出身。天子親試進士、優等曰状元、探花、榜眼。省試考官、朝廷命正副二人、為正者二三品官、為副者六七品官、必須進士出身者。会試特簡大總裁三四員、大学士三四品官、始与此選。別有監生、明時所創、專由捐納。^②三年一試、試場劃室容膝、禁出外七日。試四書・五經・詩賦・策道・小楷。^③会試者一萬人、登第者不過百人。耗有用精神於無用八股、黃口入学、白首無成。廖燕論是事、為愚黔首之術、未為無謂也」。

【注】①「生員」明清時代、最も低い試験に合格して府学・県学で学んでいる者。②「捐納」金を納めて官職を得ること。③「小楷」小さな楷書体の漢字。④「廖燕く之術」廖燕は清初の人。一六四四―一七〇五年。廖燕がその「明太祖論」(『二十七松堂文集』卷一)の中で「吾以為明太祖以制義取士与秦焚書之術無異、特明巧而秦拙耳、其欲愚天下之心則一也(吾以為えらく明の太祖 制義を以て士を取るは秦の焚書の術と異なる無し、特明は巧みにして秦は拙かりしのみ、其の天下の心を愚かにせんと欲するは則ち一なりと)」と述べているのなどを指すか。廖燕にはまた「習八股非読書説」(同前卷十二)もある。

訳文 早朝、爆竹の音があちこちから聞こえてきた。「観音の誕生日を祝っている」とのことだった。二人の商人が、大きな釜を仏前に設け、煮えたぎった油で動植物や雑多な物を揚げている、「観音秘方の膏を練っているのだ」と言っている。無適氏に昼食を食べさせた。そのとき無適氏が言うことには、「中国の知識人が奔走するものとしては、科挙の及第が第一です。州県の学官が書院の生員を試験するのを院試と言ひ、及第した者を秀才もしくは庠生と言ひます。庠生が省へ行つて受験するのを省試もしくは郷試と言ひ、及第した者を举人もしくは孝廉と言ひます。举人が都に会して受験するのを会試と言ひ、及第した者を進士出身と言ひます。天子が親しく進士を試験することもあり、その試験で優等だった者を状元、探花、榜眼と言ひます。省試の試験官には、朝廷が正副二人を命じ、正となる者は二三品の官、副となる者は六七品の官で、必ず進士出身者で

あることが必要です。会試には特に大総裁三四員を選びますが、大学士の三四品の官であって、始めてこの選に与かります。別に監生というものがあり、明の時創められたもので、専ら捐納によります。試験は三年に一度で、試験場はやつと膝を入れられるほどの広さに部屋を区切っており、七日間、外出が禁じられます。四書・五経・詩賦・策道・小楷の試験が行われます。試験を受ける者は一萬人ですが、及第する者は百人に過ぎません。有用の精神を無用の八股にすり減らし、小さな子供のとき学校に入り、白髪頭になっても成就しません。廖燕がこのことを論じて、『人民を侮るの手段』としたのは、いわれのないこととは言えません」。

原文 十日〔廿日〕過弥勒寺。坐有一僧名普晋、贈余『陰符素書』。無適曰、「此人立誓刻仏経、麻衣草鞋、日行市上、打鉦募縁、不以雨雪廢一日。今己〔已〕刻若干卷」。郭少泉〔京〔宗〕儀〕來訪。曾在我邦、為福沢氏所延、授中語。

【注】①「郭少泉〔京〔宗〕儀〕」郭宗儀。少泉はその字。浙江省嘉興府秀水県出身。書家。慶應義塾に設置された支那語科（明治十二～十四年存続）で中国語講師を務めたことがある。②「福沢氏」福沢諭吉。一八三四～一九〇一。慶應義塾の創立者。

訳文 弥勒寺を訪れた。普晋という名の僧が座に着いていて、私に『陰符素書』を贈与してくれた。無適氏が言うことには、「この人は誓いを立てて仏経を刻み、麻布の衣に草鞋で、毎日町を行き、鉦を打って布施を請い、雨や雪が降っても一日も休んだことがありません。今すでに若干巻を刻んでいます」。郭少泉〔宗儀〕氏が来訪した。かつて我が国にいて、福沢氏に招かれ、中国語を教えたことがある。

原文 十一日〔廿一日〕王夢薇〔廷鼎〕來訪。為曲園高弟。曰「聞老師屢說高著、不禁渴仰、來見」。情意極懇。設酒留談。曰「中土人物、大抵浮華少実。僕歷游六七省、足跡涉數萬里、而所心折、止曲園師一人」。問法事、曰「通觀二十四史、其与夷狄戰、尤為無策」。又評馮夢香曰、「經學考摭、冠同門諸子、唯為人拘泥、且以權樵子母為事。論其品、不及孫漁笙」^①。余數聞硯雲說漁笙、問此人何如、曰「漁笙中烟毒、病目且聾、為廢人」。此皆懷才不遇、抑鬱無聊之所致。談移刻。曰「余壳藥為活。病客在門、不可游談」、辞去。此人直挹其所見、不少修飾、極為快人、唯非我邦學歐米、曰「聖人之道、自有致富強之法。貴國不求于此、而求於彼、殆下喬木、而入幽谷者」^③。嗚呼陸有輪車、海有輪船、網設電線、聯絡全世界之声息。宇内之變、至此而極矣。而猶墨守六經、不知富強為何事、一旦法虜滋擾、茫然不知所措手、皆為此論所誤者。

【注】①「以權樵子母」意味不明。②「孫漁笙」孫煥。道光・光緒の人、字は漁笙、定海（今の浙江省舟山）出身。③「下喬木、而入幽谷」『孟子』滕文公上に見える語句。良好な環境から劣悪な環境に転じ入るたとえ。

訳文 王夢薇〔廷鼎〕氏が來訪した。曲園氏の高弟である。彼が言うことに、「老師がしばしば高著の話をされるのを聞き、渴仰を禁ぜず、参りました」。情意きわめて懇ろである。酒を用意して引き留め、話をした。彼が言うことに、「中国の人物は、大抵浮華で中身に乏しい。私は六、七省を歴遊し、足跡數萬里にわたりますが、心から敬服するのは曲園師だけです」。フランスとの件を問うと、「二十四史を通観してみますと、今回の夷狄との戦い方は、非常に策のないものと言えます」。また、馮夢香氏を評して、「經学・考証学では、同門で第一ですが、ただ、人となりが頑固で、且つ利子と元金を独り占めにすることに専念しています。その品格を論じるなら、孫漁笙氏に及びません」と言った。私はしばしば、硯雲氏が漁笙氏の話をするのを聞いていたので、この人はどのような人かと問うと、彼が言うことには、「漁笙氏は阿片の中毒になり、目を病み且つ耳も聞こえなくなつて、廢人になっています」。これも、才能がありながら認められることがなく、抑鬱無聊の結果そうなんだのだ

ろう。しばらく話をすると、彼は「私は薬屋で生計を立てております。病気の客が来ていますので、おしゃべりしているわけにもまいりません」と言って、辞去した。この人は自分の目で見た事柄に依拠して、少しも飾り立てない。きわめてさっぱりした人だった。ただ、我が国が欧米に学んでいるのを諷って、「聖人の道には、おのずから富強を成し遂げる方法が備わっています。貴国がこちらに求めず、あちらに求めているのは、ほとんど喬木を下って幽谷に入るようなものです」と言った。ああ、陸には汽車があり、海には汽船があり、電線を網の目のように張り巡らして、全世界の動静をつなぎ合う。宇内の変化は、このような段階に至り、極まっているにもかかわらず、なおも六経を墨守し、富強の何事たるかを知らず、一旦法虜が騒ぎを起こすと、茫然として対処の仕方を知らないのは、すべてこのような論に誤られているのである。

原文 十二日〔廿二日〕過少泉、方理行裝、曰「去遊金華」。少泉涉書畫、為人書牌榜、糊口四方。過鎮海門。層樓屹立、其左一埠有子胥廟、香火不斷。訪朱硯臣、示先世壽帖、曰「余家餘姚朱氏、為浙東名族」。余曰、「果然、朱舜水同宗」、因說舜水東遁伝宋學之事。硯臣大悅、出示家譜。譜後附舜水小伝、伝有「島中納言侍女十二人不近」句。此紀源中納言賜侍女十一人、舜水不敢近者^①。中人不知中納言為官名、故有此誤。

共過茶肆。吳山当前、老樹鬱蒼。坐有李姓、曰「累拳不捷、来此業商」。余曰、「此為実學。不見子貢貨殖、為七十二弟子所推乎^②」。滿坐一笑。

【注】①「島中納言く不敢近」「島中納言」とは、元禄三年、徳川幕府から隱退の許可が下り、養嗣子に水戸藩主を継がせた後、中納言に任じられた徳川光圀を指すと考えられる。朱舜水が日本での四十年間、侍女十二人を近づけなかった、もしくは女性と接しなかったことについては、邵念魯の「明遺民所知録伝十七朱之瑜」や今井弘濟・安積寛同撰の「舜水先生行実」に記されている。②「子貢く所推乎」「史

『記』貨殖列伝に、子貢が孔子について学んだ後、曹・魯で物資を蓄積したり、時機を待って売ったりして財産を築いた旨記されているのを踏まえた発言。

訳文 少泉氏を訪ねてみると、ちょうど旅支度の最中で、「金華へ行く」ということだった。少泉氏は書画に携わり、人のために牌榜を書き、生活のため居所を転々としている。鎮海門を通った。二階建て以上の建物が屹立している。その左の埠頭に子胥の廟があり、香をたく火が絶えない。朱硯臣氏を訪ねると、先祖の寿帖を示して、「私の家系は餘姚の朱氏で、浙東の名家なのです」と言った。私は「ならば、朱舜水の同族ですね」と応じ、舜水が東に逃れて宋学を伝えたことを話した。硯臣氏はたいそう喜び、家譜を出して見せてくれた。譜の後に舜水の小伝が附せられており、伝に「島中納言の侍女十二人を近づけなかった」という文があった。これは源中納言が侍女十二人を賜ったが、舜水は敢えて近づけなかったということを記したものである。中国人は中納言が官名であることを知らなかったために、このような誤りが生じたのだろう。

共に茶店に立ち寄った。呉山を前にして、老木が鬱蒼と茂っている。座に着いていた李姓の人がこう言った。「何度も受験したが合格せず、ここに来て商売をしています」。私が「それが実学ですよ。子貢も商売をして、七十二人の弟子に推称されたのをご存じではないのですか」と言うと、満座どっと笑い声が起った。

原文 十三日〔廿三日〕雨。無適来示『申報』曰「十五日法軍艦五隻衝臺灣、陷雞籠砲臺、發使上海、告曰『我兵已拔雞籠。和戰、唯貴國所為』」。余每逢士人說法事、多笑為過慮。臺灣東洋要地、一旦歸彼手、東洋多事、始于此也。

至夜、無適来示上海書信、曰「公署有命云『邦人在內地者、速歸上海、避危難』」。公署已有此命、余不可獨優游此地、乃擬同無適反棹上海、雇舟。

訳文 雨。無適氏が来て、『申報』を示して言った。「十五日、フランスの軍艦五隻が臺灣を攻撃して鵝籠砲臺を陥れ、使者を上海に発し、『我が軍は既に鵝籠を攻略した。和か戦か、貴国次第である』と通告しました」。私は知識人に会うたびにフランスとの一件についての話をするのだが、たいてい取り越し苦労と笑われてしまう。しかし、臺灣は東洋の要地であるから、一旦フランスの手に帰すれば、東洋の多事多難がその時から始まるであろう。

夜になってから、無適氏が来て、上海からの書信を示して、言った。「官署から命令が来ました。内地にいる邦人は、速やかに上海に帰り、危難を避けよとのことです」。官署からそのような命令が出たのなら、私一人この地で悠々としてゐるわけにはいかないので、無適氏と上海に帰ることとし、舟を雇った。

原文 十四日〔廿四日〕晨過夢薇告行。恐其驚人聽、直曰、「得上海報。一大官要余与赴北京」。夢薇曰、「僕在此、未尽地主之責。盍緩旬日為西湖之遊」。余辞大官告期、不可緩一日。曰「僕雖識面日淺、通覽高著、備悉于胸腹。特切傾慕。請自今天涯地角、書信往復、以訂文字神交」。余不覺為天涯知己〔己〕之感。

濯理行事。無適示『申報』曰、「中土鑄大砲、購輪船、開招商・機器二局、糜幾千百萬金。而雞籠之戰、砲声一發、萬兵驚逃。不如省此萬億兆銀錢、千百人心力、不鑄一砲、不練一兵、任彼蹂躪我土地、占捩我郭域、攘奪我利源、憑凌我赤子之為愈也」^①。此語外人読之、猶且憤懣。况隸其土籍、食其土毛者乎。抑英人畧取彈丸黑子一香港、猶能網東洋貿易大利。台灣大島、一朝屬法手、捩中日之上流、制控御之權、此東洋局面一變者。

昔年臺灣之變、余就諸書、抄其地沿革。登載此。曰台灣距福州省城、五百四十里、距澎湖島、二百里、四面皆海。東西亘五百里、南北二千八九百里、山脉起雞籠、尽沙馬碇、亘一千里。山東山西、原野接海、土性肥沃、一歲三熟。隋大業中、虎賁陳稜、一至澎湖島、東望大洋而返。『宋史』云、「澎湖以東、有毘〔毘〕〔畚〕〔舍〕那国」、是也。明嘉靖中、海賊林道乾占捩、為琉球人所逐。

天啓中、日本逐琉球人畧其地。後荷蘭獻貢物求澎湖、不允。乃陷重幣日本人、拋是地開互市場、遂逐日人。我邦史伝不載此事、恐當時所称倭寇類。明末鄭氏始畧此地。鄭氏名芝龍、漳州人、始附日本、以台灣為根拠之地、多造船楫、橫行洋海、勢威頗張。後附清朝、屢平劇盜。会閩大旱、乃發大舶、徙饑民數萬、給人三金一牛、墾闢草萊、漸成郡邑。及芝龍去、荷蘭構城郭、民戶數萬、散居四方、各就本業。荷蘭法稅市舶、不稅田畝。閩人聞之移住如歸。荷蘭專与日本・呂宋・占城・暹羅諸国、往来貿易、百貨輻湊。鴻蒙一變、風氣大開。芝龍在日本日、娶婦生一子、曰成功字大木、有英才。順治年間、奉福王倡義、百敗不撓、將復台灣為根拠之地、以軍艦數百隻、往攻。荷蘭善拒、相持半歲。成功約之曰、「復先人故土、則足矣。子女玉帛、任汝帶去」。具大舶、載婦本国、凡二千餘人。鄭氏相伝三世、三十有八年、力屈、遂降清国。是為康熙二十二年。置諸羅・台灣・鳳山三県、後增彰化・恒春・淡水・新竹・宜蘭五県、設巡臺御史、總轄水陸兵八千人、後增兵額為一萬四千。東北沿海、生蕃所巢窟^④。其地莽蒼、人口蕃衍、至二百五十萬。而生熟蕃種^⑤、二十分居其一。產塩・鹿茸・牛皮・紅檀・麝香・花布・椰子・白糖。開埠以來、石炭及茶、大為西人所称。

【注】①「『申報』」愈也」これに該当する『申報』の記事は、その第四千零六十九号（西曆一八八四年八月十一日）一面の「論雞籠失守事」であると思われる。対応する箇所を引用する。「夫中土自同治初元以来、製鎗砲、購輪舟、造水雷、開船局、歲糜千百萬金貲、（中略）乃甫一交綏而聞炮驚逃、（中略）曾不如省此萬億兆銀錢、千百人心力、不製械、不練一兵、任歐人蹂躪我土地、佔拠我城池、攘奪我利源、憑陵我赤子之為愈乎」。「製」と「械」の間は、もともと一字分空白。読点は筆者が加えた。②「虎賁」官名。③「三金一牛」これに関しては、古く明末清初の黄宗義（一六一〇～九五）の「賜姓始末」に、この時の閩の大旱魃に際し、鄭芝龍が「飢民數萬人を招き、人ごとに銀三兩を給し、三人ごとに牛一頭を給し、海舶を用い載せて臺灣に至」つたと記されている。その後、清の龔鼎の『臺灣小紀』では、「人ごとに三金一牛を給」したという叙述に変化している。④「生蕃」臺灣の高砂族のうち、山地に住み漢族に同化していなかった原住民に対して用いられた呼称。⑤「生熟蕃種」生蕃と熟蕃。熟蕃は臺灣の高砂族のうち、漢族に同化していた原住民に対して用いられた呼称。

⑥「花布」模様のある木綿布。

訳文 早朝、夢薇氏を訪ね、別れを告げた。びつくりさせてはいけないと思い、「上海から知らせがありまして、ある高官と一緒に北京へ行きたいとのことなのです」という言い方をした。夢薇氏は、「私はここに住んでいながら、まだ地元の者としての義理を果たしておりません。旬日延期して西湖見物でもなさいませんか」と言ってくれた。私はその高官が期日を知らせてきたので、一日も延期するわけにはいかないと断った。氏が言うことには、「私はお目にかかってから日は浅いというものの、ご高著を通覧して、つぶさに了解し、特に敬慕の念切なるものを覚えます。どうか今後、遠く隔たつても、書信をやり取りし、文字による心の交際をさせていただきたい」。私は覚えず、天涯に知己を得た気持ちになった。

濯は出発の準備をしている。無適が『申報』の次のような記事を見せてくれた。「中国は大砲を鑄て、汽船を購ひ、招商・機器の二局を開き、何千何百萬金もの金を費やした。ところが、鶏籠の戦いで砲声ひとたび発するや、多くの兵が胆をつぶして逃げだした。何億兆もの金銭、何千何百人もの心血を省き、一門の大砲も鑄ず、一名の兵も訓練せず、敵が我が土地を蹂躪し、我が領地を占拠し、我が資源を奪い取り、我が人民を虐げるに任せた方がましであつた」と。これらの言葉は外国人が読んで、怒り悶えてしまう。まして何世代も前からこの土地に暮らし、土地の産物を食んでいる者はなおさらであろう。そもそも英国人は彈丸のごとき小さな香港を略取しただけで、東洋貿易の莫大な利益を掬い取ることができている。台湾という大きな島が、一朝フランスのものとなり、中国・日本の上流階級をよりどころにして、支配権を握られたら、東洋の局面が一変する契機となる。

昔年の臺灣の変遷につき、私は諸書に当たり、その沿革を書き写した。ここに登載しよう。臺灣は福州省城から五百四十里、澎湖島から二百里、四面みな海である。東西は五百里にわたり、南北は二千八、九百里、山脈は鶏籠から沙馬碇まで一千里にわたる。山の東も西も、原野が海に接し、地味は肥沃で、一年に三度実る。隋の大業年間、虎賁の陳稜が一度澎湖島まで行き、

東の大洋を眺めて帰ってきた。『宋史』に「澎湖以東に毘舍那国がある」というのが、それである。明の嘉靖年間、海賊の林道乾が占拠したが、琉球人に駆逐された。天啓年間、日本が琉球人を駆逐して、その地を攻略した。その後、オランダが貢ぎ物を献じて澎湖を求めたが、許されなかった。そこで、オランダは手厚い贈り物で日本人を手なづけ、この地に拠って交易場を開き、日本人を追い払った。我が国の史伝にこのことを載せていないのは、恐らく当時のいわゆる倭寇の類であつたからだろう。明末になって、鄭氏がこの地を攻略した。鄭氏は芝龍がその名で、漳州の人、初めは日本に従属し、台湾を根拠地として多くの船を造り、海洋を横行して、その勢威はすこぶる拡大した。その後、清朝に従属して、しばしば大泥棒を平らげた。折しも閩が大旱魃に見舞われると、大きな船を差し向けて、飢えた人民数萬を移住させ、人に三金一牛を給し、荒野を開墾して、しだいに都を造り上げた。芝龍が去ると、オランダが城郭を構え、数萬の世帯の人々が四方に分かれて住み、おのおの本業に就いた。オランダの法では、貿易には課税されたが、田畑には課税されなかった。これを聞いた閩人は、まるでといた場所に戻るかのように、喜んで移住した。オランダは専ら日本・ルソン・チャンパ・シャムの諸国と往来貿易し、百貨が輻湊した。渾沌の状態から一変し、氣風が大いに開けた。芝龍は日本にいた時、妻をめとり、男子が一人生まれていた。成功、字は大木、英才があつた。順治年間、福王を奉じて義兵を起こし、何度敗れてもたゆむことなく、臺灣を根拠地として取り戻そうと、軍艦数百隻を率いて攻め寄せた。オランダはよく防ぎ、対峙すること半年。成功が次のような約束をした。「先祖の故郷を取り戻せば満足だ。子女玉帛は、なんじらの連れ去るに任せよう」。オランダは大きな船を用意し、計二千餘人を本国に載せて帰った。鄭氏は三世続き、三十八年にして力尽き、清国に降った。康熙二十二年のことである。清国は諸羅・臺灣・鳳山の三県を置き、その後、彰化・恒春・淡水・新竹・宜蘭の五県を増し、巡臺御史を設けて水陸の兵八千人を統轄させ、後に兵員を一萬四千に増やした。東北沿海は、生蕃の巢窟である。その地は原野で、人口が増殖し、二百五十萬に達しており、生熟蕃種が二十分の一を占める。塩・鹿茸・牛皮・紅檀・麝香・花布・椰子・白糖を産する。開港以来、石炭及び茶は、大いに西洋人に称賛されている。

原文 十五日〔廿五日〕晨訪笠菴、仁敬齋在。要二人探天竺・飛來・靈隱三勝、二人以雨後泥淖辭。余曰、「盍雇轎」。轎夫要
価無厭、乃与二人出湧金門。至三雅亭、天陰、湖色黯淡。飛來峯、岩洞玲瓏、峰巒蒼潤。天竺・靈隱二巨刹、占山腹勝地、宛
然仙山樓閣。前游湖心反棹、不及往探、竟為百年憾事。亭上呼酒。此遊不可再、為倒騎下廬山之念。^①

更過敬齋。敬齋滿人、隸八旗。聞粵匪仇視滿人、滿種無男女、屠殺無遺。杭陷日、八旗三千人、放火焚死、慘亦甚矣。相携
觀府學。重門三層、乱後蕩然、纔遺文昌閣・高官祠而已〔已〕。入學舍、見沉嘯雲^②、煮茶供点心。過顧雲臺告別。

【注】①「倒騎下廬山之念」意味不明。②「沉嘯雲」七月十一日本文の「陳嘯雲」か。

訳文 早朝、笠菴氏を訪ねると、そこに仁敬齋氏もいた。二人に天竺・飛來・靈隱の三勝への相伴を頼んだが、雨後、道がぬ
かるみ滑りやすいと言つて断られた。私は、「轎を雇つてはどうですか」と提案した。しかし、轎夫は途方もない値を吹つか
けてきた。二人と湧金門を出た。三雅亭まで行つたが、空が曇り、湖の眺めは暗澹としていた。飛來峯は、岩窟が玲瓏で、峰々
には緑の光沢があつた。天竺・靈隱の二巨刹が山腹の景色のすぐれた所を占め、あたかも仙人の住む山の楼閣のようだった。
前に来たとき湖心で棹を反し、見て回るに及ばなかつたのが、案外、遺憾なこととして今も残つていた。亭で酒を注文した。
この旅は今回きりであるから、馬の向きを変え廬山を下つていくような思いであつた。

あらためて敬齋氏を訪ねた。敬齋氏は満州族の人で、八旗に属する。粵匪は満州族の人を敵視し、満州族は男女の別なく、
一人残らず虐殺し、杭州が陥落した日、八旗三千人が放火して自ら焼け死んだという話を聞いた。悲惨なることはなほだしい。
連れ立って府学を見に行った。重門三層は乱後、跡形もなくなつていて、わずかに文昌閣・高官祠だけが残つていた。学舎に
入ると、沉嘯雲氏がいた。茶を沸かし点心を振る舞つてくれた。顧雲臺氏を訪ね、別れの挨拶をした。

原文 十六日〔廿六日〕丁松生〔立誠〕^①来訪。夢薇故人。談及法事、言頗危激。曰「東南釐金、僅給防海、民稅僅給國用。財政不立、何以処大變」。中土人構虛文好大言、無一堅忍人。余曩在滬、聞一洋人言、曰「中土自今大平三十年、天下大乱、較西晉末世更甚、至六十年始息。台灣歸日東、朝鮮歸俄國、新疆四分五裂、為有力者所并」。又曰、「中国始冊劉永福、為安南國王、必無今日之事」。此言特為贖贖。中人病在不得外情。

申牌薛仙林寺、過弥勒寺、促無適同發。行原野中四五里、密石平墳。粵匪乱前、此間皆為四達通區。遙見突兀広厦、為貢院。^④垣壁高聳、為兵營。營卒在門外、操土工、觀余異妝、爭相笑罵、其無規律、可知。度一水、出大東門。一江遶郭為内河。度橋左折、有抽釐署、檢商船、徵稅。松生所謂「東南釐金、僅給防海」者。其法豪富人、歲納金額設此局、檢商船貨物、稅百分一。粵匪之乱、軍需無所仰、故權設此法、以濟一時。官知其困公私、而財計不足、因循至今日。江程所在設立、俗呼為卡局。西牌登舟。舟小、僂僂出入、極為局束。夜泊半山。

〔注〕①「丁松生〔立誠〕」丁丙（一八三三—一八九九）のこと。松生はその字。兄の丁申とともに、近代の蔵書家として著名。②「釐金」商品通過税。店舗を構えた商人には商品交易税、行商人には商品通過税を課したり、国内の通行貨物に対し、各省の交通要所で特別にかけた税金。③「劉永福」一八三七—一九一七年。清朝末期の軍人で、黒旗軍を組織し、インドシナに出兵したフランスとの戦いで功績を挙げた。④「貢院」科擧の試験所。郷試、会試が行われる場所。

訳文 丁松生〔立誠〕氏が来訪した。夢薇氏の旧友である。話がフランスとの問題に及ぶと、すこぶる激烈な言い方をした。「東南の釐金はわずかに海防に使われているだけ、民が納めた税はわずかに国の歳出に使われているだけです。財政が確立しなければ、何によって大変に処するのでしょうか」。中国の人は形式だけの文章を書き、大言を好み、堅忍する人など一人もない。私は上海にいたとき、ある西洋人が次のように言うのを聞いたことがある。「中国は今から太平なること三十年の後、天下が

大いに乱れ、西晋の末期よりもっとひどい状態になり、六十年たつて始めて治まるでしょう。臺灣は日本に帰し、朝鮮はロシアに帰し、新疆は四分五裂して、有力な国に併合されるでしょう。丁松生氏はまた、こうも言った。「中国が初めから劉永福氏を安南国王に立てていたならば、きっと今日の問題は起こっていなかったでしょう」。この発言は特に愚かである。中国人のよくない点は、国外の情勢を把握していない点にある。

午後四時ごろ、仙林寺を辞して、弥勒寺に立ち寄り、無適氏を促して一緒に出発した。原野の中を行くこと四、五里の間、石がびっしりと平らに埋められていた。粵匪の乱の前は、この一帯はどこも、四方に通じる地域だった。遠くに高くそびえる大きな建物が見えた。貢院である。高い壁が聳え、兵営となっている。兵卒が門外で土木作業をしていたが、私の変わった服装を見て、我先に笑ったり罵ったりした。その規律のなさが知られよう。一筋の水路を渡り、大東門を出た。一筋の川が郭を巡っており、その内側を内河という。橋を渡って左折すると、抽釐署があった。商船を検査し、課税する所だ。松生氏が「東南の釐金はわずかに海防に使われているだけ」と言った、あの釐金を課す所である。豪富の人が毎年、金を納めて、この役所を設けたもので、商船の貨物を検査し、百分の一の税を徴収する。粵匪の乱のとき、軍需を仰ぐ先がなかったため、さしあたりこの法を作り、一時しのぎをした。お上は、このやり方が公をも私をも苦しめることになると分かっているものの、財政不足のため、今日まで踏襲している。川の航程のあちこちに設立し、俗に卡局と呼ばれている。

午後六時ごろ、舟に乗った。舟は小さく、腰を曲げて出入りするようになっており、ひどく狭苦しい。夜、半山に舟を泊めた。

原文 十七日〔廿七日〕雨時至。兩岸皆桑田、樹長六七尺、至採葉時、併条伐去、称曰拳桑。支条叢生、類拳有指也。我邦自根伐去、此間自幹伐去、此為異耳。中土貿易絲茶為第一。觀洋人貿易表、上海輸絲、四倍我橫濱、其盛可知、唯繰絲不用器械、欧米織匠、攢斥不買、価値頓折、中商坐是失産。杭胡雪巖為三豪商一、以是破産、大官無不受累。中人不取機器、其弊一至此。

至塘西踰一壩、与外河合。遙望臨平諸山、出沒雲烟之中。暮抵石門県、泊舟西門下。粵匪之乱、兩浙（浙）被禍尤甚。石門本為大県、而居民四散、唯見七層塔巍立於荆棘之中爾。

訳文 雨になった。兩岸はいずれも桑畑で、木の長さは六、七尺、葉を摘む時には、枝ごと切り取る。これを拳桑と称する。枝が叢生しているのは、拳に指があるのに似ている。我が国は根から切り取り、こちらは幹から切り取る、その点が異なるだけである。中国の貿易は生糸と茶を第一とする。西洋人の貿易表を見ると、上海の生糸輸出は、我が横濱の四倍である。その盛んなことが知られよう。ただ、繭から糸を繰るのに機械を使わないので、欧米の織物師が攢斥して買わず、急に値崩れが起こり、中国の商人はそのため資産を失った。杭州の胡雪巖は三豪商の一人であったが、そのせいで破産し、高官も巻き添えを食わない者はなかった。中国人が機械に目を向けない、その弊害がそのような事態を招いたのである。

塘西に至って一つの壩を越え、外河と合した。遠くに臨平の山々が雲煙の中に出没するのが眺められた。暮れに石門県に至り、舟を西門の下に泊めた。粵匪の乱のとき、兩浙はひどい禍に遭ったという。石門はもと大きな県であったが、住民が四散し、ただ七層の塔が荆棘の中に高くそびえているのが見えるだけだった。

原文 十八日〔廿八日〕此間江程、皆來時所紀。正午至嘉興府、江流岐為二派、右派經松江府注上海、左派達蘇州。右折過太平橋、束蘆葦分画水面如田陌。問之、曰菱田。船窓觀夢薇所餞『嵒齋子』。安徽人江順詒所著、曲陳時病、讜言正議、不少忌諱、中土固不乏憂世之士也、唯曰「阿片己（己）不可禁、不若許民種罌粟、以防外至」、此殆月攘一雞者。後聞之、山西・四川諸省、盛種罌粟、年增一年、噫。雷雨時至、涼氣颯然。暮泊陽廟。

【注】①「江順詒」？一八六二年頃在世。安徽省旌德の人。②「月攘一雞」『孟子』滕文公下篇に見える、毎日隣の鶏を盗んでいた者が、ある人にその非道を指摘され、「ならば、一日に一羽盗むのをやめ、一月に一羽ずつ盗むことにし、来年になったら、盗むことをやめよう」と答えたという話に基づく。誤っていることを知りながら、直ちに改めないたとえ。

訳文 この一帯の川筋は、すべて来た時に記したとおりである。正午に嘉興府に着いた。流れが二つの支流に分かれ、右の支流は松江府を経て上海に注ぎ、左の支流は蘇州に達する。右折して太平橋を過ぎた。農道のように、アシを束ねて水面を区切っている。尋ねてみると、菱田というらしい。船窓で夢薇氏が饒別にくれた『嵎廬子』を読んだ。安徽の人江順詒が著したもので、当時の悪弊を詳しく述べ、正論を展開して、少しも忌諱していない。中国も実は、世を憂える知識人に乏しくなかったわけである。ただ、「阿片は既に禁じようがなくなっているから、民が罂粟を栽培するのを許すことにより、外から至るのを防いだ方がよい」と述べているのは、ほとんど例の月に鶏を一羽ずつ盗む者のように、問題の解決を引き延ばすやり方である。後に聞いたところでは、山西・四川等の省では、罂粟の栽培が盛んで、年を追って増えているという。ああ。折しも雷雨となり、さあっと涼しい空気が広がった。暮れに陽廟に舟泊まりした。

原文 十九日〔廿九日〕観輪船挽二大船駛走、旗旆署官名。中人皆知輪船之便、而不盛開航路濟民用者、恐水手舵工、立失生路、起為流賊也。余謂兩江乱後、良田荒廢、若率水手舵工失生路者、從事開墾、就產実業、則一挙兩得者。若兇民起為流賊、命督撫討平耳。糜糧養兵、固備兇民作乱而已〔已〕。

入一大湖、曰朱家蕩。蕩謂渺漫類湖者、又有称滙称浜者、諸流会合之謂。石橋設眼五、呼曰放生橋。望見女牆、隱見江上、是為青浦県。松江府距此三十里。天色俄變、雷雨傾盆。而舟子牽百丈、駛走岸上、如不知暴雨者。舟子趨捷、能耐艱苦、唯有

少間、対臥篷底、吹毒烟、如毒烟以外、不知人間有樂事者。

訳文 汽船が二隻の大きな船を引いて進んでいくのを見た。旗に官名が署せられている。中国人がみな汽船の便を知っているにもかかわらず、盛んに航路を開いて人民の生活を便利にしてやらないのは、水夫や舵手が立ちどころに生計の道を失い、決起して流寇となることを恐れるからである。しかし、私には、両江の乱後、美田が荒廢しているから、水夫や舵手で生計の道を失った者を開墾に従事させ、生産の仕事をさせたら、一挙兩得であろうと思われる。もし凶悪な者どもが立ち上がって流寇となったなら、督撫に命じて平定させるだけである。食糧を浪費し兵を養うのも、もとはと言えば、凶悪な者どもが乱をなすのに備えるためののだ。

一つの大きな湖に入った。朱家蕩という名だ。蕩は、広々として湖に類するものことで、また、漚と称するものや、浜と称するものもある。もろもろの流れが合わさる所のことである。五つの目のある石橋がある。放生橋と呼ばれている。女牆が川のほとりに見えつ隠れつしている。青浦県である。松江府はここから三十里である。にわかには空模様が変じ、盆を傾けたような雷雨になった。ところが、水夫は竹の綱を引いて、岸辺を走り、暴雨など知らぬ者のようである。水夫は敏捷で、艱苦に耐えることができる。ただ、ちよつとでも暇があれば、苦の底に向かい合つて横たわり、毒煙を吹き、毒煙以外、この世に楽しいことがあるの知らないかのようなのである。

原文 廿日〔三十日〕一橋曰千秋、有兵營。上海距此六七里、故設嚴兵備外人、營壘扼江、塗土為壁、舟人曰、「土壁不屋、故每雨改塗」^①。江流漸隘、曲折而過。望見瓦屋參差、烟突聳空、是為上海。潮涸、移乘小舟。觀機器突起三四丈、曰激水機器。洋館各戶、仰是水、称曰自来水。上海機器、激水電燈、我邦所亡。至大橋上岸載行李車輪車、抵広業洋行。二宮姓至、曰「三

日前、曾元帥發此歸南京、專修兵備。法人陷雞籠、中兵火炭壙而遁。法人失望、以兵寡、退保軍艦」。是游自上海至寧波、往復四五千里、一資舟楫、不勞寸步。天下豈多有此陸海形勝之地乎。唯中人人不講富強之實政、格致之実学、居今世而行古道、驚虛文而忽実理。其為彼所輕侮、抑有故也。広業洋行、樓面大江、左右馬路、輪蹄絡繹、不分昼夜。花氈玻窓、椅案臥榻、具極精良、頓為入別境之念。

【注】①「土壁」改塗」意味不明。②「格致之実学」清朝末期の物理・化学・生物など自然科学の総称。「格致」はもと、事物の原理を究め知識を得ることを言う朱子学の用語。

訳文 千秋という名の一つの橋があり、そこに兵營があつた。上海がここから六、七里であるため、嚴重に兵士を配備して、外から侵入する者に備えてある。兵營の周りの堀が長江の防備を固め、土を塗つて壁としている。水夫が言うことには、「土壁は頑丈ではない。だから、雨が降るたびに塗り直す」。川の流れがしだいに狭くなり、曲折して過ぎていく。瓦ぶきの家々が高さを競い合つて立ち並び、煙突が空に聳えているのが見えてきた。そこが上海である。潮が引いたので、小舟に移り乗つた。三、四丈の高さで突起している機械が見える。激水機器という。洋館は各戸、この水を頼りにしており、自来水と称する。上海の機械や激水・電燈は、我が国にない物である。大きな橋に着き、岸に上がつて荷物を一輪車に載せ、広業洋行まで行つた。二宮氏が来て、こう言つた。「三日前、曾元帥はここを發つて南京に帰り、専ら兵備を修めています。フランス人が鶏籠を陥れるや、中国兵は炭鉞に火を放つて逃げました。フランス人は拍子抜けし、兵が少ないため、退いて軍艦を守っています」。この旅は上海から寧波まで、往復四、五千里、ずっと舟を使い、少しも歩かずに済んだ。天下にこれほど素晴らしい陸海の景勝地がこんなにも多くあるうとは。ただ、中国人は富強のための實際的な政治や、格致の实学を重視せず、今の世にありながら古の道を行い、形式だけの事柄を努め、実理をゆるがせにしている。彼らがフランス人に輕侮されるのも、そもそも理由の

あることなのだ。広業洋行は、建物が長江に面し、大通りが左右を走り、車馬の往来が昼夜の別なく続いている。花の絨毯にガラスの窓、椅子に長テーブルに寝台、みな精緻を極め、とみに別世界に入ったような気分になった。

観光紀游卷三終

序

原文 我友岡君天爵^①將游漢土。人或曰「殊域之游、分寸以上、皆待黃白。故游者多待官資。今天爵以韋布儒生、不仰官資、獨力拳此游。天爵何以自給」。余笑曰、「余交天爵四十年、世知天爵無余若焉。此非所患於天爵也」。天爵在茗鬯、學資無所出、蓬首垢面、傭書自給。一日鬻友赴親病、無以資旅費。天爵慨然貸金救之。其篤於友誼、如斯。天爵有大節、不可以非義于〔干〕之。奧羽連盟抗王師、天爵仗義死爭、遂為当路所仇、下獄殆死。大義所在、不可以死生禍福奪其節、如斯。天爵以能文名天下、其所作質実雄健、運以胸臆、行以法度、佳処往往逼古人。所著米法^二一史・『尊攘紀事』諸種、行於天下、其有文章著述之才、如斯。天下或有篤於道義如天爵者、而兼文章如天爵者、余未見其人。天下或有能文章如天爵者、而兼道義如天爵者、余未見其人。天爵躬此兩者、以游天下、不問域内外、固無不可游也。抑天爵此游、我有為漢土慶者。夫漢土大國也、而中世以後、政綱漸弛、士大夫不知域外大勢一變、非尋常思想所能及、墨守旧學、說唐虞三代、以礼楽文物大邦自居、語及域外、則曰「夷狄禽獸」。嗟乎亦誤矣。天爵此游、与彼士大夫周旋、使彼知九州之表、六經之外、固不乏人物、則彼必有所瞿然以反、惕然以警。如此則天爵此游所関、固不為鮮少也。

明治甲申五月

阿波 高銳一^②謹序

【注】①「天爵」岡鹿門の字。②「高銳一」一八三三〜九五。号は雲外。昌平鬯出身。維新後は内務省・農商務省に歴任した。

訳文 我が友、岡天爵氏が中国へ旅立つことになった。「国外への旅は、短時日の旅でない限り、金銭が必要になってくる。ゆえに旅する者は多く官費を当てにする。今、布衣の儒者である天爵氏は、官費を仰がず、独力でこの旅を行おうとしている。天爵氏は何によって自弁するのだろうか」と言う人がいた。私は笑って、こう答えた。「私は天爵氏と交わること四十年、世の中で天爵氏を知ること、私以上の人はいない。旅費の工面は天爵氏を悩ませる問題とはならない」と。天爵氏は昌平黻時代、学資の出どころがなく、ぼさぼさの頭に垢まみれの顔をして、人に雇われ文書の書き写しをして自弁していた。ある日、学友が親の病に駆けつけようとしたものの、旅費に当てる金がなかった。天爵氏は慨然として金を貸して、その学友を助けた。氏の友誼に篤いこと、かくのごとくである。天爵氏には、不義によって犯すことのできぬ、大いなる節操がある。奥羽連盟が官軍に抵抗したとき、天爵氏は義にのっとりて必死に抵抗したため、政権を握っていた者に憎まれ、獄に下され、死の危機に瀕した。大義のあるところ、死生禍福によって氏の節操を奪うことのできぬこと、かくのごとくである。天爵氏は能文をもつて天下に名高く、その作るものは質実で力強く、胸の内をめぐらし、理にかなった書き方がしてあり、その素晴らしさは往々にして古人に肉薄する。氏が著した『米利堅志』と『法蘭西志』の二史・『尊攘紀事』等の書物が、天下に広まっている。その文章著述の才があること、かくのごとくである。天下にあるいは道義に篤いこと天爵氏のような人もいるかもしれないが、文章を兼ねて天爵氏のような人は、私はまだ見たことがない。天下にあるいは天爵氏と同じくらいに文章を善くする人がいるかもしれないが、道義を兼ねて天爵氏のような人は、私はまだ見たことがない。天爵氏はこの二つの長所を備えて、天下を旅するから、域の内外を問わず、どこへでも旅することが可能である。そもそも天爵氏の今回の旅には、私が中国のために喜んである点がある。中国は大国である。しかしながら、中世以後、政治の綱領がしだいに緩み、士大夫は、国外では大勢が一変し、尋常の考え方では追いつかない状態になっていることを知らず、古い学問を墨守し、唐虞三代を説き、礼楽文物の大国と自認し、国外の話になると「夷狄禽獣」と言う始末である。ああ、見当違いもなはだしい。天爵氏が今回の旅で、彼の国の士大夫と交際し、彼らに中国以外、六経以外でも実は人も物も乏しくはないのだということを分かせたなら、彼らはきっとはっ

として反省し、びくつとして戒める機会を得るだろう。そうなれば、天爵氏の今回の旅の関わる事柄は、実は少なくないということになるのである。

明治甲申五月

阿波 高鋭一 謹序

序

原文 我邦之通漢土、漢魏以来、至隋唐最盛、其見書史、吉備真備・安倍仲磨諸人、辞藻彬彬、与彼土人士、倡和歌詠、至今使人欽羨、為藝苑美談矣。中世以降、喪乱相繼、両国互絶交通、間有至者、不過緇徒商僧之流、無一足言矣。今也国家与海外列国訂盟、互差公使、以駐国都、冠蓋来往、相尋於途。学士大夫亦以蕃外情為先務、争講西学。其航至欧米者、不知幾千百人。而漢土実与我為比隣同文之邦、而未聞有学士大夫一遊其地者。

我鹿門岡先生、将往遊其土、一詢其俗、親与彼学士大夫、上下其議論。先生以能文名当世、剛知其触感慨者、托之詠歌、其動耳目者、著之文章、鬱然為大著。我邦学士大夫、以蕃外情為先務者、得伝觀其書、悉其山川風俗制度、自先生此游而始焉。抑先生懷有為之才、經世之畧、而不用於当世、衆皆為先生冤之。剛独謂使先生俯仰俗間、奔走形勢之途^①、則何能得脱然放浪域外萬里之地、以極耳目之觀、如此游之壮乎。夫物固不両得。安知非先生之不用於当世者、天之所以盛先生之文乎。剛少辱先生之知。故於其行、叙此言以贈。

明治星次甲申五月

南総 高橋剛 謹撰

【注】①「奔走形勢之途」韓愈「送李愿歸盤谷序」に見える語句。

訳文 我が国の中国との交流は、漢魏以来、隋唐に至って最も盛んになった。書籍に見えるものとしては、吉備真備・阿倍仲麻呂らの人たちが、詞藻も優雅に礼儀も正しく、彼の国の人士と倡和して詩を詠んだことが、今に至るまで人々に文藝界の美談として羨まれている。中世以降は、戦乱が相継ぎ、両国は互いに交通を絶った。たまに行き来した者もあったが、僧侶・商人の類に過ぎず、言うに足るものは一例もなかった。しかし、今は国家が海外の列国と条約を結び、互いに公使を遣わして国都に駐在させており、高官や貴人が往来し、互いに訪問し合っている。学士や大夫も国外の事情を審らかにすることを何よりも優先し、争って西洋の学問を講じている。欧米へ航行する者は、何千何百人いるか分からない。これに対し、中国は実のところ我が国と隣接する同文の国であるにもかかわらず、学士や大夫で一度でもその地に旅した者がいるとは聞いたことがない。

我が鹿門岡先生は、この国を旅し、ひとたびその風俗を尋ね、親しく彼の国の学士・大夫と議論を闘わせようとしておられる。先生は能文をもって当世に名高いが、その感慨に触れる物事は詠歌に託し、その耳目を動かす物事は文章に著し、それらが鬱然として大著となるであろうことを、私は知っている。我が国の学士・大夫で、国外の事情を審らかにすることを何よりも優先する人たちが書物を回し読みして、中国の山川・風俗・制度を知ることができるようになるのは、先生の今回の旅から始まるのである。そもそも先生は有為の才、経世の方略を抱きながら、当世に用いられておられず、皆が先生のために悔しく思っている。しかし、私はこう思うのである。もし先生が俗間を見回し、勢力のある人物の所へ行く道を走り回っておられるだけであつたなら、自由に国外の萬里の地に放浪し見聞を広げることが、今回の旅ほど大きなスケールでできただろうか。物事はもともと、二つを同時に得ることのできぬものである。先生が当世に用いられないのは、天が先生の文才を一層豊かにしようとしているからではないだろうか。私は若い時から先生の知を辱くしている。ゆえに先生のご出発に当たり、以上の言葉を述べて、お贈りする。

明治星次甲申五月

南総 高橋剛謹撰

觀光紀游卷四

宮城県

岡千仞振衣 撰著

姪 濯萬里 校訂

滬上日記

原文 余在杭州、聞雞籠之變、倉皇反棹。王夢薇書至、曰「法虜何為。錯愕如斯、獨不為湖山之所咲乎」。余書答曰、「上海為東洋最大埠、而余館大古馬頭第一樓、日与王紫詮・張經甫・岸吟香諸人会飲、醉則睨欧米軍艦、裊然如城者、議論五洲大勢、拔劍起舞、自忘為狂。假令湖山笑余錯愕、亦不害為快游」。不知夢薇為如何。將待中法事決、而北游。小留月餘日、草滬上日記。

訳文 私は杭州にいた時、鶏籠の變を聞き、倉皇として船で上海に戻った。王夢薇氏から次のような手紙が来た。「法虜が何をなしましょう。それほど驚いては、杭州の美しい湖や山に笑われてしまいますよ」と。私は次のような返事を出した。「上海は東洋最大の港です。私は大古馬頭の第一樓に泊まり、毎日、王紫詮・張經甫・岸田吟香氏らと会して酒盛りをし、酔えば、城のように高く大きな欧米の軍艦を睨みつつ、全世界の大勢を議論し、劍を抜いて立ち上がって舞い、自分が氣違ひじみたことをしていることも忘れている始末です。仮に私が魂消たことが湖や山に笑われたとしても、上海での日々も痛快な旅であることに変わりはありません」。夢薇氏はどう思われただろうか。中仏の問題が決着するのを待つて北遊しようと思いつつ、一月餘り滞在し、滬上日記を草した。

原文 八月廿一日〔七月一日〕二宮姓来、共訪張經甫。庭陳火槍器仗数件、曰「法虜無狀、国事危急、不可一日懈戎備。因約同志諸子、編隊伍、定条規、巡視城市、以防匪類乘間窃発」。姚子讓葛士源来会、皆忼慨論法事。余問勝算所在。經甫曰、「凡兵經百戰、始能精鍊。今也朝議堅操戰論、法虜已開釁臺灣、両国互不相降。則我義憤鬱積、如劉永福者、陸統輩起。陷十八省於必死之地、要全勝於年月之後、則必可得其要領也」。余嘉其論有欄柄、拳所見為説。三子大悦。酒後延樓上。架上有姚子梁『琉球志』、經甫序卷首、痛擯我県琉球^①之為無名。余曰、「往時英法二国隔一海峡、百戦争雌雄、淬勵銳鋒。世以其戦亘百年、曰百年之役。二国之強、雄視欧土、実由是戦也。我東洋各国、各鎮四疆、其与隔海鄰国接鋒、有蒙古寇我邦、我邦伐朝鮮二役而已。其兵威不振、速欧米之侮、実有故也。而中土一旦以我邦県琉球之故、大挙問罪、則我邦雖弱小、独立東海二千年、勢不得不一戦。一戦而敗則再戦、再戦而敗則三戦。不以千敗百挫、少屈其銳鋒、決雌雄於百戦之後。如英法百年之役、則中日大艦巨砲、猛將健卒、視大海如平地。於是、両国解怨譁和、協心戮力、西其鋒、則欧米各国、無一足懼者。此可以雪東洋積年之辱也。僕林下人、不知県琉球之何故、唯一目東洋威武震欧土、則足矣」。衆皆大笑。

【注】①「我県琉球」明治十二年、日本政府が琉球の廢藩置県を断行して冲縄県を設置し、琉球の日本への帰属を推し進めた、いわゆる「琉球処分」を指す。

訳文 二宮氏が来た。一緒に張經甫氏を訪ねた。庭に銃砲や武器の類数丁が並べられていた。氏が言うことには、「法虜が無礼なため、国事が危機に見舞われており、一日も警戒を怠ることができません。そこで、同志諸君と約束して、隊伍を編成し、規則を定め、町を巡視して、不逞の輩が隙を狙ってひそかに行動を起こすのを防いでいるのです」。姚子讓氏と葛士源氏もやって来た。みな慷慨してフランスとの問題を論じた。私が勝ち目はどこにあるのかと尋ねると、經甫氏はこう言った。「凡そ兵とは百戦を経て、はじめて精鍊することができものです。今や朝議は堅く主戦論をとっていますが、法虜も既に臺灣で戦端

を開いており、両国は互いに降伏しようとはしていません。そのため、我々の義憤は鬱積しており、劉永福氏のような人が陸續として立ち上るでしょう。十八省のすべてを瀕死の状態に陥れ、完全な勝利を何年何か月かの後に求める覚悟があれば、うまくいく方法を必ず得ることができましょう」。私は彼の論に拠り所があり、見た事柄を挙げて説いた点を嘉みました。三氏は大変喜び、酒を振る舞った後、樓上に案内してくれた。棚に姚子梁氏の『琉球志』があった。経甫氏が巻首に序文を書き、我が日本が琉球に県を設置したのは筋が通らぬと痛烈に非難している。私はこう言った。「往時、英・仏二国は一海峡を隔て、百戦して雌雄を争い、そのため兵力を鍛錬し続けました。世の人は、その戦が百年にわたることをもって、百年の役と呼びました。二国の強がヨーロッパを見下すようになったのは、実はこの戦のためだったのです。我が東洋各国は、おのおの四方を鎖しており、海を隔てた隣国と鋒を交えたのは、蒙古が我が国を侵略したのと、我が国が朝鮮を伐ったのと、この二役があるだけです。東洋各国の兵力が振るわず、欧米の侮りを招いたのは、実は理由のあることだったのです。しかし、中国がひとたび、我が国が琉球に県を設置したことを理由に、大挙して罪を問うならば、我が国は弱小とはいえ、東海に独立すること二千年、勢い一戦せざるを得ません。一戦して敗れたら再戦し、再戦して敗れたら三戦します。千回敗れ百回挫けたぐらいでは、少しも攻撃の勢いを屈せず、英仏百年の役のように、雌雄を百戦の後に決するでしょう。そうなれば、中・日の大艦・巨砲、猛将・勇士は、大海をもものともせず、平地のごとく行き来して戦うでしょう。かくして、両国が怨みを解いて講和し、心と力を合わせ、その鋒を西に向けるなら、欧米の各国など、一つとして恐れるに足るものはないでしょう。そのようにすれば、東洋数年の辱めをすぐことができるのです。私は在野の人間でから、琉球を日本の県としたのが何のためなのか知りませんが、ひとたび東洋の威武がヨーロッパを震わすのを目にすれば、満足です」。みな大いに笑った。

原文 廿二日〔二日〕雨。詣公署。安東領事病辭。見太田書記、納護照公文。吟香來過。余曰、「目下中土、非一掃烟毒与六經毒、

則不可為也。六經豈有毒乎。唯中人拘泥末義、墨守陳言、不復知西人研究實學、發明實理、非爛熟六經所能悉。孟子不言乎、『信書不如無書』。六經有可信者、有不可信者。^①若不信其可信者、而信其不可信者、則六經之流毒、何異老莊之毒晉宋乎。吟香擊案為名言。夜暴風。

【注】①「目下不可信者」八月一日に記した所信とはほぼ同内容。②「晉宋」晉（二六五～四二〇）と南北朝の宋（四二〇～四七九）。

訳文 公署へ行つた。安東領事には病氣を理由に面会を断られた。太田書記に面会し、旅行券を納めた。吟香氏がやって来た。私は彼にこう言つた。「目下、中国は、阿片の毒と六經の毒とを一掃しない限り、どうしようもありません。六經は別に毒のあるものではないのですが、中国人は枝葉末節の解釈にこだわり、陳腐な言葉を墨守しており、西洋人が実學を研究し實理を發明しているのは六經に爛熟したからできるようになったことではない、ということが分かっていません。孟子が言いませんでしたか。『尽く書を信ぜば書無きに如かず』と。六經には信ずることのできるものもあるが、信ずることのできぬものもあります。信ずることのできるものを信ぜず、信ずることのできぬものを信じたなら、六經は、老莊が晉宋に流したのと同じくらしいの毒を流すに違いありません」。吟香氏は小机を叩いて、名言だと感心してくれた。夜、暴風になった。

原文 廿三日〔三日〕雨。平野姓来、曰、「法人開兵端以来、各国軍艦在中土者、會議編艦隊、護各埠。各国軍艦、以英艦衆且整、推主約束」。又曰、「電信報法公使徹〔撤〕国旗去北京。法軍在中土者八千、中土多事始于此也」。晚過吟香小酌。忽接片紙日報、曰「今午法軍艦在福州者、砲擊砲臺及造船局、中兵奔潰、死傷無算」。

訳文 雨。平野氏が来て、こう言った。「フランス人が戦端を開いて以来、各国の軍艦で中国に来ているものは、会議の結果、艦隊を編成し各港を守っています。各国の軍艦の中で、イギリス艦が多く且つ整っているので、推されて統轄の役を担当しています」。また、こうも言った。「フランス公使が国旗を下ろして北京を去るとの電信がありました。フランス軍の中国にある者八千、中国の多事多難が今から始まるでしょう」。晚、吟香氏を訪れ、少しだけ酒を酌み交わした。そこへ突然、日本の新聞紙片が届けられた。次のように書いてあった。「今日の午後、フランス軍艦の福州にあるものが、砲臺及び造船局を砲撃した。中国兵は総崩れとなり、死傷者は無数である」。

原文 廿四日〔四日〕日報備載戦事、曰「福州所繫泊法虜軍艦、本日發使告曰、『期明日八点鐘開戦』。使退、俄然發砲、火造船局、覆七軍艦、長門金牌砲臺、閩安馬尾軍營、無一完壁（壁）、提督張佩綸失措先遁^①」。中土機器局四所、天津・金陵製硝藥・大小砲、上海・福州製輪船・軍艦。左元帥之督閩浙、聘法人日格爾、^②投巨萬創是局、刻五年造軍艦十五隻、頗為巨構、而今付一炬、真可歎惜者。

【注】①「張佩綸」一八四八～一九〇三。官僚。清仏戦争の際には福建軍務会辦を務めていた。②「日格爾」ジケル。一八三五～八六。一八六一年に寧波税関の初代税務長官に就任した時から左宗棠との交際が始まり、その後、六七年から生涯を終えるまで福州船政局の造船事業に携わった。

訳文 日本の新聞はこの戦争に関することを詳しく書いており、次のような記事があった。「福州に停泊していた法虜の軍艦が、本日、使者を遣わして、『明日八時を期して開戦する』と通告させた。使者が退くや、俄然發砲し、造船局を燃やし、七隻の

軍艦を転覆させ、長門・金牌砲臺、閩安・馬尾軍營、一つとして完璧なものなくなり、提督張佩綸は狼狽して、我先に逃げ出した」。中国の機器局は四か所あり、天津・金陵は火薬や大小の砲を製造し、上海・福州は汽船・軍艦を製造している。左元帥が閩浙総督であったとき、フランス人ジケルを聘し、巨萬を投じてこの局を創設し、五年を期限として軍艦十五隻を製造した。非常に大がかりなことであったが、今、灰燼に帰してしまった。まことに嘆かわしい限りである。

原文 廿五日〔五日〕王紫詮来訪。余以一掃烟毒与六経毒振起中土元氣為説。紫詮笑曰、「更有一毒、并貪毒為三毒。中土大小政事、成於賄賂。余嘗草言戰・言和二篇、痛論和戰得失、如聽者如充耳何。中土六省皆面海、不可一一備軍艦築砲臺。今日之事、唯有待彼上岸、而制勝野戰耳」。既而松村少将来過、見紫詮筆話曰、「彼安知兵。中人輒曰、法人長水戰、而短陸戰。法国三面皆陸、陸軍精海軍數等。中人輒曰、彼懸軍萬里、我以逸待勞。殊不知氣艦出沒無形、一戰得要領、則駛出洋外。中土防備、有一隙可乘、則鑼鑼敵海、吶喊轟天、坐使中兵取困弊。方今兵尚機器、求精精中、愈出愈精。故各国設海陸兵学校、專科講兵、尚且取敗。中土未有此設、其講火槍、亦不過習熟歩武進退。此未戰而勝敗之算已判者。未知紫詮言戰・言和、果論及此等事否」。余曾讀魏源「聖武紀」。其論水戰曰、「水戰莫急操舟、舟戰莫要火器。練水師、宜備水器、水器莫烈火器、火器莫精且習西洋人。火器製於内地、不如購之洋外」^①。此數言見極透矣。而今開四所機器局、謂我已〔已〕有彼長技、悍然起与之交鋒、此未為得焉。

【注】①この引用文の出处と考えられるのは、『聖武記附録』卷十四武事餘記、議武五篇、水守篇の一節。道光二十六（一八四六）年本を底本とする魏源撰、韓錫鐸・孫文良点校『聖武記』（中華書局、一九八四年）により、原文を掲げる。「水戰莫急于舟、舟戰莫急于兵、水兵莫急于器。（中略）水師習矣、宜備水器。水戰之器、莫烈于火炮。（中略）其制莫精于西夷、其用莫習西夷、与其制之内地、不如購之外夷（水戰は舟より急なるは莫く、舟戰は兵より急なるは莫く、水兵は器より急なるは莫し。（中略）水師 習いたれば、宜しく水器を備うべし。

水戦の器は、火炮より烈しきは莫し。(中略) 其の制は西夷より精なるは莫く、其の用は西夷より習れたるは莫く、其の之を内地に制するよりは、之を外夷より購うに如かず」。

訳文 王紫詮氏が来訪した。私は、阿片の毒と六経の毒とを一掃し、中国の活力を振るい起こすことの必要性を説いた。紫詮氏は笑って、こう言った。「もう一つ毒があります。貪毒と合わせて三毒です。中国の政治上の事は、大小となく賄賂で決まるのです。私はかつて『言戦』『言和』の二篇を草し、徹底的に和戦の得失を論じたことがあるのですが、聞く者が耳を塞いでいるも同然なのは、どうしようありません。中国の六つの省は海に面していますが、その一つ一つに軍艦を備え砲臺を築くことはできません。今回のフランスとの戦争は、あちらが上陸するのを待つて、野戦で勝利を収めるしかありません」。まもなく松村少将がやって来て、紫詮氏の筆談の跡を見て、こう言った。「彼にどうして軍事が分かりましょう。中国人はすぐ、フランス人は水上の戦いに長じ、陸戦は不得意だと言います。ところが、フランスは三面みな陸、陸軍の方が海軍より数段優れているのです。中国人はすぐ、あちらが孤軍でこちらの奥深く入ってくるまで、こちらは力を貯えつつ待つて、あちらが疲れた頃に攻撃しようと言います。しかし、これなど、蒸気機関で動く軍艦は神出鬼没で、一戦して目鼻を付けたら、さつさと遠くへと出て行ってしまふものだということが、全く分かっています。中国の防備に一つでもつけ込む隙ができれば、戦艦が海を覆い、呐喊が天に轟き、いながらにして中国の兵を苦しみ疲れさせることになるでしょう。方今、兵器は機械を重視し、精巧な上に精巧さを求め、益々精巧になって来ています。そのため、各国は海陸の兵学校を設け、専科で兵器に関する講習を行っていますが、それでも敗戦の憂き目に遭っているのです。中国にはまだそのような施設がなく、銃砲の講習にしても、歩き方や『進め』『回れ右』に習熟する程度に過ぎません。となれば、いまだ戦わずして既に勝敗の見通しが付いているようなものです。紫詮氏の『言戦』『言和』は、果たしてこれらのことに論及しているのでしょうか。私はかつて魏源の『聖武紀』を読んだことがある。魏源は水上の戦を論じて、次のように述べていた。「水上の戦いでは舟の操縦より急を要するものではなく、

船で行う戦いでは火器より重要なものはない。水軍を訓練するには、水上用の武器を備えるべきだが、水上用の武器は火器より烈しいものではなく、火器はひとまず西洋人に習うのが一番よく分かる。火器は国内で製造するより、国外から購う方がよい。これらの言葉はものの見方が極めて透徹している。にもかかわらず、今四か所の機器局を開設し、自分たちには既に西洋人同様のすぐれた技が備わっていると思ひ込み、強硬に立ち上がって西洋人と鋒を交えるのは、妥当なやり方とは言えない。

原文 廿六日〔六日〕抵田代客棧、見三河静修。静修開書肆漢口、売日東書籍、勸余游、曰「漢口与河南朱仙・江西景德・広東仏山、称四大鎮、而此地為最盛。長江可以溯四川・雲南・貴州、漢水可以達河南・陝西・甘肅、四通水路。匯集九省、人口六十萬、実為中土最要区。風俗豪奢、人氣慄慄（慄、悍）。曾・左諸公平粵匪、多用是間兵。子独不知洞庭・岳陽・黄鶴・鸚鵡諸勝蹟乎」。余游意勃然、乃約終北京・広東二游、則一帆溯長江、因付著書数部、令為名士先容。士源・維藩來過、曰「昨日福州砲臺擊破法艦二隻」。余曰、「鼓舞衆憤、振作士氣、不以少挫屈、不以少勝驕、要全勝於百戰之後。如經甫所論、則必可得其当也。後聞之、訛伝。唯勅諭載是事、或偽奏捷歟。誣罔亦甚。

【注】①「田代客棧」上海で最も早く開店した日本商店、田代屋のこと。明治元年、長崎出身の田代源平が開いた。②「名士先容」「名士」は「名刺」の誤りではないかと思われる。「先容」は、あらかじめ紹介・推挙する意。

訳文 田代屋へ行き、三河静修と会った。静修は漢口で書肆を開き、日本の書籍を売っている。私を漢口に来させようとして、こう言った。「漢口は河南の朱仙、江西の景德、広東の仏山とともに四大鎮と称していますが、漢口が最も盛んです。長江は漢口から四川・雲南・貴州に溯ることができ、漢水は漢口から河南・陝西・甘肅に達することができます。水路が四方に通じ、

九つの省がここで合わさり、人口六十萬、實に中国の最も要となる地域です。風俗は豪奢で、人々の心は剽悍です。曾・左の諸公は粵匪を平らげるのに、多くこの地方の兵を用いました。先生は洞庭湖・岳陽・黃鶴樓・鸚鵡樓といった名所をご存じありませんか」。私はにわかに訪れてみたい気持ちになったので、北京・広東の旅を終えたら、船で長江を溯ることを約束し、名刺代わりに著書数部を贈呈した。土源氏と維藩氏がやって来て、こう言った。「昨日福州砲臺がフランス艦二隻を撃破したそうです」。私はこう言った。「多くの人々の怒りを鼓舞し、士氣を奮い立たせ、少し挫けたからといって屈せず、少し勝ったからといって驕らず、經甫氏が論じたように、完全な勝利を百戦の後に目指せば、妥当な結果が得られるでしょう」。後に聞いたところでは、訛伝だったという。ただ、勅書にはそのことが載っている。あるいは皇帝に対し偽りの勝利の報告をしたのだろうか。嘘について人をだますにも程がある。

原文 廿七日〔七日〕与紫詮・耘劬、觀丹桂園劇場。方演「死諸葛走生仲達」、跳身旋轉、刀光躲閃、使人不可端倪。余笑曰、「練熟至此、兵始可用」。紫詮曰、「天地一大劇場、唯冷眼看過、為曠人達士耳」。次演「寡婦訓子」、「嫖漢挑嫖婦」^②、畧同我邦雜劇。唯服飾華麗、珠玉爛燦、我邦所不及。

夜文夫与堀井〔常三〕・沼崎〔甚三〕^③二姓来話。文夫掌會計曰、「自發東京、己〔己〕費二萬金」。余常論我邦海島、急于海軍、而国計有限、不如併陸軍為海軍。蓋己〔己〕軍於海、無不可軍於陸之理也。

【注】①「丹桂園劇場」一八六七年の開設後、二度の閉鎖を経て一八八四年に大新街四馬路口に新たに建てられた、京劇上演の劇場、「丹桂茶園」のことと考えられる。②「寡婦く嫖婦」「嫖」では意味をなさないので、この字は「嫖」の誤まりと思われる。「嫖婦」も寡婦の意。なお、この日の『申報』に掲載されている丹桂茶園の当日の上演予定劇目の中にこれらのものは見当たらない。③「堀井〔常三〕」一八五九?。?

明治十一年頃、若年で攻玉社の数学系科目の教師を務め、その後、途中の経歴は不明であるが、二十八年十月に呉鎮守府監督部部員海軍大主計を免職になっている。④「沼崎〔甚三〕」？（一九〇四。明治二十一年、その著『萬国公法要訣』（博聞社）が発行されている。二十七年頃、警視庁第三部第三課長、三十三年頃、千葉県安房郡長、三十五年五月から石川県能美郡長を務めた。

訳文 紫詮・耘劬の両氏と、丹桂園劇場で芝居を見た。ちょうど「死せる諸葛 生ける仲達を走らす」を上演していた。身を躍らせて回転し、刀の光をきらめかせつつ、さっと身をかわしたり、目まぐるしい変化をする。私は笑って、こう言った。「ここまで熟練してこそ、兵も用いることができますね」。紫詮氏は、「天地は一大劇場で、冷静な目で見守っていられる人を、世俗を超越した人とか達観した人と言うのです」と言った。次に「寡婦訓子」と「嫖漢挑婆婦」が演じられた。ほぼ我が国の通俗演劇と同じである。ただ、服飾が華麗で、珠玉が燦爛たるところは、我が国の及ばない点である。

夜、文夫氏が堀井〔常三〕・沼崎〔甚三〕の二氏とともに来談した。文夫氏は会計を掌っており、こう言った。「東京を発ってから、既に二萬金を費やしました」。私は常々、我が国の島は、海軍を求めるに急であるが、国の経済に限りがあるから、陸軍を海軍と合併するに如くはないと論じている。既に海の軍隊を設けている以上、陸の軍隊を設けてはならないという理屈は成り立たないのである。

原文 廿八日〔八日〕曾根俊虎来、曰、「明日乘天城艦、觀福州戰迹」、因托木村信卿^①所囑書東、寄何子戔。信卿坐為子戔製日本地図、下獄冤白日、子戔己〔己〕西歸。故囑余致意子戔。何意、此戰子戔管造船局、当戰発、狼狽奔竄。為物論之所外。人間禍福、何常之有。為之慨然。

【注】①「木村信卿」一八四〇～一九〇六年。仙台に生まれる。つとにドイツ学を修め、江戸に出て西洋の兵学を講じ、維新後兵部省に出仕し、陸地測量官となった。

訳文 曾根俊虎氏が来て、「明日天城艦に乗り、福州の戦跡を見に行きましょう」と言い、木村信卿氏から頼まれた書簡を何子義氏に送ってほしいと言って、私に託した。信卿氏は子義氏のために日本地図を製作したかどで投獄されたのだが、冤罪が晴れたときには、子義氏は既に清国に帰っていた。そこで、子義氏への挨拶を私に頼んだのである。ところが、あに図らんや、今回の戦のとき子義氏は造船局を取り仕切る立場にあったにもかかわらず、戦が勃発するや、狼狽して逃げ出してしまった。論外な行爲である。この世の禍福には、常なるものはない。そう思うと、嘆かわしい気持ちになった。

原文 廿九日〔九日〕姚子讓・范蠡泉・朱莘田来過、論中法曲直。余曰、「以強敵強而後、曲直為老壯」^①。若以弱敵強、雖直亦老。趙宋於蒙古、朱明於國朝、以弱敵強、故不競而已〔已〕。俄國重武、皇子皇孫、亦皆入饗學兵。學成、為隊長、而後將校、積功累勞、始授將帥。今中土募無賴惡少、不敢齒人者為兵、以是敵歐兵。此雖直亦老者」。二子又不言。

夜与二宮姓歩公園。園為洋人游歩而設者。大江当前、坡陀迤邐、花卉爛斑、為勝游之地。門置警卒、以中人垢汚大損園觀、禁入觀。是夜洋人奏樂。樂半驟雨傾盆。滿場狂奔、衣袂淋漓。馳車疾歸。

【注】①「老壯」ここでの鹿門のこれらの語の使い方は独特であると思われ、難解である。一応、「老」を力が衰え、間もなく尽きようとしているの意、「壯」を今まさに旺盛な力を持っているの意に解した。

訳文 姚子讓・范蠡泉・朱莘田の三氏が訪れ、中仏の曲直を論じた。私はこう言った。「強をもつて強に對抗する場合は、不義の側は老年で、正義の側が壮年となりますが、弱をもつて強に對抗する場合は、たとえ直であつたとしても、老年です。蒙古に対する宋朝、国朝に対する明朝は、弱をもつて強に当たつたため、勝てなかつたのです。ロシアは武を重んじる国で、皇子皇孫もみな学校に入つて軍事を学び、学成れば隊長となり、その後、将校まで進み、功勞を積んで始めて將帥を授かります。今、中国ではまともな人間として扱えないような、無頼や不良少年を兵として募り、そのような兵でヨーロッパの兵に對抗しようとしています。これは、たとえ直であつたとしても老年というのに当てはまるものです」。二氏はもう何も言わなかつた。

夜、二宮氏と公園を歩いた。この公園は西洋人の遊歩のために設けられたものである。長江を前にして、起伏してくねくねと伸び、草花が美しく、楽しく見て回ることのできる所である。ではあるが、入口に警備の兵卒が配置され、中国人は汚してひどく公園の景觀を損なうということで、入園が禁じられている。この夜、西洋人の音楽演奏があつた。その途中で、土砂降りのにわか雨となつた。その場にいた人たちが狂奔し、私も袖がびしょ濡れになつた。車を走らせ、急いで帰つた。

原文 三十日〔十日〕張經甫与其徒孫燕秋・梅鎮藩・梅問羹來過。余論帖括之無用、科舉之無益、不如仿歐米興大小學校、以講有用之學。經甫曰、「余屢為当路論此等事、誦言如醉。余確執戰論、固非有一勝算。庶幾是輩經一番挫折、翻然易轍、從事於此耳」。与諸客過大倉洋行。吟香亦來會。二宮・赤羽〔定教〕二姓優待、饗華饌。定教曩赴澳大利亞街奇會、曰「此地英國所殖民、盛開牧場、尋開金礦、遠近嚮至、呼曰新金山、配桑港金山。分為四州、英遣特權官辨分管。四州競力開拓、一州設鐵道一萬尺、一州更設二萬尺、駸駸乎日趨殷盛、鬱為文明大都。此會、州人大悅我邦貨物、開場日握日人手、祝曰、「他日獨立、首發專使、訂隣交」。其不甘英軛、可知也。土蕃鼻梁穿兩孔、挿草花為飾、見外人、殺之食肉」。

【注】①「帖括」科挙の試験のために、經典の語句を書き連ねたもの。②「誦言如醉」「詩經」大雅「桑柔」第十二章の第四句。

訳文 張経甫氏が弟子の孫燕秋・梅鎮藩・梅問羹とともに訪ねて来た。私は帖括が無用であることと、科挙が無益なことを論じ、欧米に倣って大小の学校を興し、有用の学を講じた方がいいと述べた。これに対し、経甫氏は、「私もしばしば当路の人のために、そのようなことを論じましたが、耳を貸そうともしてくれませんでした。私は主戦論を唱えています、実は勝算があるわけではなく、連中が一度挫折を味わった結果、翻然としてやり方を改め、大小の学校を興し有用の学を講ずる等のことに従事してくれるよう願っているだけなのです」と言った。客人たちと大倉洋行を訪れた。吟香氏もやって来た。二宮・赤羽〔定教〕二氏の優待で、中国料理を御馳走になった。定教氏は少し前にオーストラリアの展覧会に行ってきたとのことで、こんな話をしてくれた。「オーストラリアはイギリスの植民地です。牧場が開かれ、ついで金鉱が開かれたので、遠近から大勢の人がやって来ました。新金山といい、サンフランシスコの金山と対にされています。四つの州に分かれ、イギリスが特権官僚を遣わし、別々に統治させています。四つの州は開拓に力を競い、一つの州が鉄道を一萬尺敷設したら、別の州がさらに二萬尺敷設するといった具合で、日に日に盛んになり、近代的な大都会ができています。この展覧会で、現地の人はいたいそう我が国の品物を気に入ってくれ、開会の日には日本人と握手し、『将来独立したら、最初に特使を派遣し、国交を結びたい』と言って祝福してくれました。彼らがイギリスの輓に押さえつけられたままではいけないことが、知られるでしょう。原住民は鼻梁に二つの穴を穿ち、草花を挿して飾りとしていて、よそから来た人を見ると、殺してその肉を食っています」。

原文 三十一日〔十一日〕約経甫親扶桑艦。余従二宮姓及濯、詣扶桑艦。因平野姓見松村少将。少将方至自長江、展横卷地圖及英人測量図、談金陵・鎮江・漢口各埠地理風俗、頗詳悉。午後経甫率子源・問羹而至。少将遣哨船、迎田辺生為舌人、説示

大砲・電燈・蒸氣諸機器。經甫每事詳聞、新製諸砲、又能諳砲名。其平生用心外事、可知。中土士人耗精科學、不復遑及他書。經甫独用心外事、唯生長滬上、未嘗一乘軍艦。經甫猶然、况其他乎。

訳文 經甫氏との約束で、扶桑艦を見学した。私は二宮氏と濯に従い、扶桑艦の停泊地へ行った。平野氏を通じ松村少将に会った。少将は長江からやって来たところであった。横巻の地図とイギリス人の測量図を広げ、金陵・鎮江・漢口各港の地理風俗を談じ、すこぶる詳細だった。午後、經甫氏が子源・問羹を連れてやって来た。少将は哨戒船を遣わして田辺君を迎え、彼を通訳として、大砲・電燈・蒸氣等の機械につき説明した。經甫氏は事に詳しく尋ね、新式の砲類については、その名をそろんじてしまうほどであった。彼が平生国外の事に関心を向けていることが、知られよう。中国の知識人は科學に精力をすり減らし、他の書物に目を向けるいとまがない。そのような中で、經甫氏は独り国外の事に関心を向けているわけだが、ただ、上海で生長したにもかかわらず、これまで一度も軍艦に乗ったことがなかったという。經甫氏にしてそうなのだから、他の人は言うまでもなからう。

参考文献

單行本 中村孟著、沼崎甚三記『萬国公法問答』（海軍兵学校、一八八七年十二月序）。沼崎甚三『萬国公法要訣』（傳聞社、一八八八年）。『官報』第三千六百九十一号（一八九一年）。鈴木藤三編『現行警察令典』（星野錫、一八九四年）。『官報』第五千二百号（一九〇〇年）。吉田周蔵編『安房郡農会第七回報告』（安房郡農会、一九〇〇年）。慶應義塾編纂兼發行『慶應義塾五十年史』（一九〇七年）。『梨洲遺箸彙刊』（上海時中書局、一九一五年）。『石川県能美郡誌』（石川県能美郡役所、一九二三年）。『石川県史』第四編（石川県、一九三二年）。菊田定郷『仙臺人名大辞書』（仙臺人名大辞書刊行会、一九三三年）。王韜著、汪北平・劉林整理『弢園文録外編』（中華書局、一九五九年）。伊藤漱平訳『紅樓夢（中）』

〔平凡社中国古典文学大系第四十五卷、一九六九年〕。朱舜水著、朱謙之整理『朱舜水集』（中華書局、一九八一年）。清俞樾撰、佐野正巳編『東瀛詩選』（汲古書院、一九八一年）。『申報』影印本（上海書店、一九八三年）。近藤春雄『日本漢文学大事典』（明治書院、一九八五年）。岩城秀夫訳『入蜀記』（平凡社東洋文庫四六三、一九八六年）。『日本名家肖像事典』（ゆまに書房、一九九〇年）。大東文化大学中国語大辞典編纂室編『中国語大辞典』（角川書店、一九九四年）。中国戯曲志編輯委員会・『中国戯曲志・上海卷』編輯委員会編『中国戯曲志・上海卷』（中国 ISBN 中心、一九九六年）。戸川芳郎監修、佐藤進・濱口富士雄編『全訳漢辞海』（三省堂、二〇〇〇年）。『朝日新聞』（復刻版）明治編（日本図書センター、二〇〇〇年）。陳祖恩著、大里浩秋監訳、芦沢知絵他訳『上海に生きた日本人——幕末から敗戦まで』（大修館書店、二〇一〇年）。魏源撰『魏源全集』（岳麓書社、二〇一〇年）。川邊雄大『東本願寺中国布教の研究』（研文出版、二〇一三年）。

論文等

周作人「關於焚書坑儒」（一九三五年九月刊『宇宙風』一集一期、後に『苦竹雜記』に収録）。王宝平「清末駐日外交使節名録」（浙江

大学日本文化研究所編『中日関係史論考』所収、二〇〇一年）。巫碧秀「清末中国における近代工業技術教育——福州船政学堂の史的究明——」（『三田学会雑誌』九十四卷三号、二〇〇一年）。易惠莉「中日知識界交流実録——岡千仞与上海書院士子の筆話」（『檔案与史学』二〇〇二年第六期）。張明傑「明治前期の中国遊記——岡千仞の『觀光紀遊』について」（Journal of Hospitality and Tourism Vol.1, No.1, 二〇〇五年）。福井智子「岡千仞と清仏戦争」（『大阪大学言語文化学』第十六卷、二〇〇七年）。根生誠「明治期の攻玉社における数学教育と数学教師養成について」（『数学教育史研究』第八号、二〇〇八年）。木山実「大倉組商会と三井物産の比較考察——明治期を中心——」（『商学論究』第五十六卷第二号、二〇〇八年）。蔣海波「明治前期東亜文化交流の一側面——漢詩人水越耕南の交友を中心に——」（『関西文化研究叢書12『東アジア三国の文化——受容と融合——』所収、二〇〇九年）。韓東育「朱舜水在日活動再考」（鈴木貞美・劉建輝編『東アジア近代における概念と知の再編成』、国際日本文化研究センター、二〇一〇年）。

（しばた・きよつぐ 本学教授）

（いのうえ・まりな 本学大学院生）

（うえむら・なおみ 本学大学院生）

（まん・さ 本学大学院生）